
異界の放浪者(仮)

白銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の放浪者（仮）

【Nコード】

N61180

【作者名】

白銀

【あらすじ】

ある日の帰り道、突然周囲の景色が変わったと思うと俺の前に現れた自称神によって自分が手違いによって死んだことを知る。自称神は侘びとして異世界に送ってくれるという。そこで、俺は自称神から5つの願いを叶えてもらって異世界に逝った。*作者は初心者です。しかも、文才がありません。ときどき暴走するかもしれません。不定期更新です。途中から設定が変わるかもしれません…。この作品は120%妄想と思いつきでできた作品です。突然の急展開が入るかもしれません。それでも大丈夫！という奇特な人はどうぞ

⋮
○

プロローグ（前書き）

はじめまして、白銀です。

初心者です。文才がありません。ときどき暴走します。

生暖かく見守ってください。

あと、ネタの伏字って題名を伏せるんですか？技名の方を伏せるんですか？もしくは両方？よければ教えてください。

プロローグ

「…どこだ此処？」

落ち着け、落ち着け俺！

何故か知らないが俺は現在^{いま}、周囲360°真っ白な不思議空間にいるのだ。

…とりあえず現在^{いま}は何故俺が此処にいるのか思い出す必要があるよ
うだな。

えーっと、俺の名前は國城優輝^{くにしろゆうき}でバリバリの高校二年生！両親は二年前に交通事故で

亡くなってしまった…まあその話は置いておいて、

たしかいつもどおり遅刻ギリギリ家を出て学校に着いて、普通に授業を受けて、帰宅部だからそのまま帰って

その後…あれ、そのあとの記憶がない、どゆこと？

「…記憶がない、そしてこの真っ白な不思議空間…、これはもしや」

「うむ、ここは死んだ者の魂が帰る場所の一手前じゃ。」

「んをわあー！」

俺は突然、背後から話しかけられて不覚にも驚いてしまい、奇声を上げながら背後にいた人物の頬を思いっきり殴ってしまった。

バキメキー！

「あべしー！？」

背後にいた人物は世紀末的雑魚の悲鳴を上げながら後方に吹っ飛んで行った。

…っていうか！さっき背後にいた奴が此処は死後の世界的なこと言っただけじゃあないの？

「いたたっ、まったくひどい目におうたわい。」

と言いつつ何事なかったかのように背後にいた人物が起き上がった。

…その人物の格好は昔読んだ本に描かれていた古代ローマの上流階級のような服を着たハリー。ツターのダン。ルド。校長のような鬚が生えている老人だった。…うーん、ここまできたら十中八九俺の思考を読むんじゃないかなあ？んで自分は神様だあゝなんて言うんだ」

「ほほう、人間にしてはよく考えているのう。いかにも、お前さんの思っている通り僕はおぬし等の言う神というものじゃ。」

あゝやつぱり、ていうかマジで思考とか読んじゃうんだ。

「いや、それは違うぞ人間よ。僕はおぬしの思考は読んでおらぬ。おぬしの思考がただ漏れただけじゃ」

はあ？マジかよ。

「マジじゃ」

「ふーん、んじゃそれはもういいや、それよりも俺は死んだのか？此処に来る記憶がないんだけど？」

「うむ？随分あっさりしておるのう。まあいいかの説明もめんどくさいしのう。それより、此処に来る時の記憶がないのかのう？」

「ああ、たしか学校から家に帰る途中までは覚えているんだがなあ……」

「ふむ、まあ自分の死因は気になるじやろうな。どれ、儂が教えてくれよう。」

「いや、教えてくれるのはいいんだけど……」

「なんじゃ？神たる儂に文句でもあるのかのう？」

「いえ！何でもありません！」

「嚙んでおるぞ……はあ、まあよい、ではおぬしの死因を言うてやろうぞ。」

「言い、この自称神様はどこから取り出した丸メガネを掛けて書類を手を持っていた。」

「今の姿を見たらただの公務員だな。」

「五月蠅いぞ人間！今説明してやる。……え……つと、おぬしの死は事故死じゃ、具体的にいうとロードローラーでミンチじゃな。」

「つんな！何故にロードローラー！なんでそんなもんに……」

「あ……それはな……ん……つと……その……つな。」

「あ？おい、なんでそこで言いずらそうにしている？…まさか teme エ」

まさか、またテンプレか？

「っう！あゝ…その…すまんかった！！」

「っ！此処までテンプレが続けばもしかしたらとも思っていたが…手違い系か？」

「う、うむ。そのとおりじゃ、本当にすまない！本当ならおぬしは寿命をまっとうして97歳まで生きる予定じゃったのだが、

こちらの書類の手違いでの、予定外の事故を起こしてしまったのじゃ。しかも本来ならば生きていなければならぬ魂だから

死後の世界に送ることもできんのじゃ。」

「ま、マジかよ。じ、じゃあ俺はこの後どうなるんだ。」

「そこなんじゃがのう。おぬし、異世界に行ってみるか？」

「は？異世界？これまたテンプレだな。剣と魔法のファンタジーの世界か？」

「うむ、そういう世界じゃ。どうじゃ、行ってみるか？侘びとしておぬしの願いを5つ程度までなら叶えてやるぞい。」

「マジで？行くぜ行くぜ行ってやるぜ！どうせ元の世界では肉体がミンチだから復活できないとかいうオチだろ？」

それなら行くぜ！異世界によ！」

「ふむ？おぬしは怒らんのか、実質儂がおぬしを殺したようなもんじゃぞ。」

「あゝいや怒る怒らん以前に死んだ実感がねえからな、しかも生き返るんだろならいいよ。元の世界にはたいして

大切な人もいなかったしな。」

両親は死んじまったし、友人はいないし、幼馴染もないし、恋人もないからな。

「つう、それはそれで悲しいのう。まあおぬしがいいんだっただしいのだがのう。…それでは、願いを言ってみい、

不老不死や神にしろとかは無理じゃができることならなんだって叶えてやるうぞ。さあ、言ってみい。」

「ふむ…」

さて、なにを願おうか…

く二時間経過く

「よし！決まったあ」

「む、やっと決まったかの。さあ、言ってみい」

「んじゃまず

1つ、その世界の知識

2つ、能力開発能力

3つ、物質具現化

4つ、自分が知っている漫画、アニメ、小説や自分のオリジナルの魔法や超能力や技等を使えるようにする。

5つ、自分が知っている漫画、アニメ、小説のキャラの身体能力（体力や魔力そのキャラの特性等を含めて）を使えるようにする。

以上だが、できるか？」

正直これはチートだからな、いくつか減らされるか制限つきだろうな」

「ふむ、この能力開発能力というのはなんじゃ？」

「あゝこれは、読んで字の如く自分の能力を開発する能力だな。こう、千里眼とかそういうな能力だ。」

「ほう、これはあれじゃな、向こうの世界ではスキルというものじゃないな。」

「ふゝんスキルねえ、あゝもしかしてこれはだめなのか？」

「やっぱり無理か」

「いや、だめではないのじゃが少し制限が付くぞ。」

「ふむ、どういう制限だ？」

てつきりだめなのかと思ったが…

「うむ、すでに向こうの世界にある『スキル』は開発できぬだけじゃ。」

「既存の『スキル』は無理ね。ん、了解。他には何かあるのか？」

これだけならいいんだが。

「あるぞ、物質具現化は生物は無理じゃ、4つ目と5つ目は神や邪神、自分の格よりも上位の存在の関連した者は無理じゃな。」

ふむ、それだけなら別に大丈夫か。

「あゝあとおぬしらの科学技術にあるAI？は生物にはいらんから。」

「あゝ了解。とりあえずは願いは以上だけど、他になんかあるのか？」

とりあえず終わったんなら早く行きたいのだが。

「そう急かすな。あとはおぬしのステータスを見るだけじゃ。」

と言いつついつの間にか手にリング大の水晶玉をもっていた。

っていうかさつきからどうやって物だしてんだ？まあ、それよりも…

「ステータス？」

「そうじゃ、この水晶に手をかざすとおぬしのステータスが表示されるのじゃ。まあ、百聞は一見にしかず、試にやってみい。」

ふむ、ステータスったら自分の实力が表示されるものだからな、向こうに行って自分の实力がわからんのは後々大変そうだからな、知っておいて損はないか…

「おし、やってみるは」

かざせばいいんだな。よつと。

ペカ――

「魚っ！眩し！！」

うつつ、目が！目があああ！！

「ほほう、おぬしなかなかの实力じゃのう。」

「ほへ？」

ん？なかなかの实力…だ…と！

「まあまあ、この水晶の中を見てみい。」

名：國城優輝

：元世界（異世界）
基本体力：F（B）
基本攻撃力：D（A）
基本防御力：E（B）
基本魔力：A（SSSS）
基本瞬発力：E（A）
基本精神力：A（SSSS）
基本運：F（C）

SSSS・SSSS・SS・S・A・B・C・D・E・F・G

……

「…これは、すごいのか？」

正直ようわからん。

「うむ、まあそうじやろうな。簡単に言うとかっこで囲まれてないのが元の世界でのおぬしの実力、囲まれているのが異世界での実力になるのじゃ。んでランクがあつての、GゝSSSSあるのじやが、GゝAまでが平凡の人間が会得できるのじゃ。SゝSSSSは一種の才能ある者でないと会得できないのじゃ。」

「ほゝって、俺魔力と精神力がSSSSなんですけど…」

「うむ、それはおぬしの才能であろうの」

「へゝそうなんだ。」

「ちなみに、攻撃力と防御力がSSSSは勇者が魔力と精神力がSSSSは魔王というらしいぞ。」

………っは？

「マジで？」

「マジじゃ、じゃから迂闊にステータスを他人に見せんほうがよいぞ。」

「ああ、そうするわ……」

魔王って…ばれたらどうなんだろう…極刑か極刑なのか？

「まあ見せんかったら問題ないじゃろうて。さて、まだ説明するものもあるがそれはおぬしに授ける『その世界の知識』で

確認でもしてくれい。」

「ん？ああ、そろそろ送ってくれるのか？」

けっこう此処にいたなあ。

「うむ、それでは送るぞい、運が良ければまた会おうぞ。」

「ああ、それじゃあな。」

「では、逝ってくるがよい。」（ニヤリ）

「はあ？何を言っ」

「はあ？何を言っている？そう言おうとした時、突然足元の感覚がなくなったと思ったら真っ黒い穴から墜ちていた。」

「ぎゃあ ああああああああああ ああああ つあああああああ

「ふおふおふお、最初に殴られた仕返しじゃよ」

糞神があああ覚えてやがれえええ必ず埋めてやるううううううう

そんなことを思いながら俺は真っ黒い穴を墜ちて逝った……

プロローグ（後書き）

おもしろい、と思ってくれた方。つまらんからもつ読まん、と思った方。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

よければ感想をお願いします。

まあ、鈍亀更新なので次がいつになるのかわかりませんが…

第一話 異界の地、苦痛の知識、修行の準備（前書き）

急展開？です。

文章がおかしいです。

ていうか無理やりじゃね？

第一話 異界の地、苦痛の知識、修行の準備

「あああああああああ！！っへぶし！？」

えっただいまの現状は真っ黒い穴の中を落ち抜けて大地に顔面ダイブしています。

「痛てえ！！顔面が！顔面が潰れるうゝゝゝ」

つくそ、あの糞神がいきなり落としゃがって、また会ったら必ず埋めちやる！

ブチブチブチブチ……

く15分く

ふう、まあ糞神への罵倒はここまでにして…

「とりあえずは現状確認だな。」

そついうと俺は周りをぐるっと見渡してみた。

…まあ、見たまんま…

「森だなあ…」

見渡した結果俺がいるのは背後に小さめの湖があり湖に沿うように木々が生えていて森になっている。

「…うん、ここはどこだろう?」

とりあえず此处は森の中ということだけがわかったが他には何もわからない、さてどうしよう?

「……あつ! そうだよ、糞神からこの『この世界の知識』を貰ってたじゃん! …あれ? どうやって知るんだ?」

俺は糞神から『この世界の知識』を貰っていたがどうやって知るのかを聞いてなかった。どうしよう? とうんうん唸りながら考えていた。

「はあ、せめて近くの街の位置だけでも知りてえなあ」

とポツリと独り言を言ったら…

ズキ、ズキズキズキズキ

「つが! ? あつ頭が! 頭が痛てえ! !」

独り言を言った途端、突然頭が割れて内側からハンマーで叩かれるような痛みに襲われた。

「ぐがああああ! !」

そして、来た時と同じように突然痛みが退いて行った…

「はあ、はあ、な、何だったんだ?」

なぜ、突然頭痛がしたのか謎だったが今は嘘のように痛みは無い。

「? ? ? ?」

ふむ、マジで何だったんだろう？つは！それよりもどうにかして近くの街にいかねえ…と…

「あれ、近くの街の場所がわかる？」

何故だ？んゝ、っは！そうか、俺が「はあ、せめて近くの街の位置だけでも知りてえなあゝ」と言つた直後に頭痛が起きたんだ。ということとは俺が「ゝが知りたい」と言つたら頭痛が起きて知りたいことを知ることができるといふことか…

「頭痛は酷かったけど終わったらどうってことなかったし、よし！
とりあえず試してみよう！んん、んじやこの世界の知識を全て知り
たい！！……あれ、文法おかしかったか？」

と油断した瞬間に、

ズキ、ズキズキズキブチブチズキ！！！！

「つ！！？つが、がああああああああああああ
あああああああ」

さっきまでとは比べ物にならないほどの痛みが今度は頭だけではなく体全体を貫いた。まるで背骨から炎があふれ出て体の内側を焼き払っているような痛み、気絶してもおかしくない痛みが1時間ぐらい、いや本当はもっと短いかもしれないがそれぐらい長く続いたような感覚だったが、先ほどと同じように突然痛みが引いて行った。

「はあ、はあ、はあ、ふう〜〜、はあ〜〜」

俺は乱れた呼吸を治すために深呼吸をし呼吸を整えたところで自分の知識を探ってみた、そしたらあった。本来なら知らないはずのこの世界のあらゆる知識があった。

「お、マジでこの世界の知識が頭のなかにあるぜ」

〜30分〜

結構な間いろいろなこの世界の知識を頭の中で読んでいた俺は何となく使い方も大体わかってきた。

この世界の知識……長くてめんどいから略して『知識』は頭の中で知りたいことを想うとその知識を知ることができるようだ。

これでいちいちあのクソ痛い頭痛を受けなくて済むなあ〜

「……そうだ、たしか俺の魔力とかって魔王級なんだよなあ〜」

ふむ、此処に来たうれしさで忘れていたが糞神からもらった能力——これもいちいち長いから略して『チート能力』と改名しよう——が無くて俺は十分強いんだったな。忘れてたぜ……

「うーん、使いこなせるかどうかと言ったら多分使いこなせないだろうしなあ……っは！そうだ、たしか某魔法先生に出てくる道具でダイオラマ球ってたしか1時間が1日になったりしたな。よし、こいつで修行するか！」

そうと決まればさっそく物質具現化能力でダイオラマ球を創るのだが……

「創り方がわからん……orz」

あゝ、どうしょ？…とりあえず『知識』のときと同じく言ってみるか。

「だが普通に言つのもなんだしかつこよく言ってみるか。」

さて、何にすっかなあゝ

ゝ15分ゝ

よし、とりあえず決めたし言ってみるか。

「スタート展開、マテリアライズ物質具現化、タイプ形状：ダイオラマ球」

と前方を指さしながら言ったら

ピカ――

「眩し！」

またかよ！でも今度は喰らわないぜ！…と、少し優越感に浸ってからおそらくダイオラマ球のほうを見てみると…

「……っえ？なにこれ？」

原作と比べ遥かに小さい、リング大のダイオラマ球らしき水晶玉があった。だが、俺が驚いたのは水晶玉の上にある

青い立体映像のほうである。立体映像に近づいてみるとそこには日本語で何か書いてあった。書かれていたものは…

『ステータス変更可能、変更しますか？はい／いいえ』

と、書かれていた。っていうかステータス？もしかして物質具現化で出した物のステータスが出てきてしかも変更できるのか？

俺はために『はい』と書かれているところを押してみた。するとステータス画面が書き換わっていた。そこに書かれていたのは…

『ステータス変更画面：ダイオラマ球

現実滞在時間：1時間

変更しますか？はい／いいえ

内部滞在時間：1日

変更しますか？はい／いいえ

出入り条件：内部滞在時間が過ぎるまで。

変更しますか？はい／いいえ

内部空間：時間停止・魔力自動回復・体力自動回復・重力十倍
変更しますか？はい／いいえ

終了しますか？はい／いいえ』

と、書かれていたので、俺は修行がしやすいようにステータスをいろいろ変更を試してみた。

『ステータス変更画面：ダイオラマ球

現実滞在時間：1秒

内部滞在時間：3年

出入り条件：任意で可能

内部空間：時間停止・食糧自動生産・魔力自動回復・体力自動回復・
重力二十倍

終了しますか？はい／いいえ』

うっし！こんなもんだろう。

俺はステータス画面を終了させた。

「ようし、んじゃ、中に入って修行するか。」

シュイン

そういつて俺は水晶玉に手をかざしてみたら吸い込まれるような感覚の後、俺は水晶玉の中に入った。

第一話 異界の地、苦痛の知識、修行の準備（後書き）

やはり無理やり感があります。

が、

もうあきらめました。

このまま突き進みます。

あと、道具も伏字にしたいほうがいいんですか？

よければ教えてください。

第二話 修行の終わり、ステータスカード、出立の準備（前書き）

汚い文章です。

少し凝りすぎました。

第二話 修行の終わり、ステータスカード、出立の準備

「1秒」

シュイン！

「ふう、久々の娑婆^{シャバ}の空気は美味いぜ！……まあこっちからしたら一秒なんだけどな。」

俺はダイオラマ球の中で三年間、自分の魔王級の魔力と神からもらった『チート能力』の制御を必死で修行したのだ。

ん？なんだ？決して手抜きじゃないぜ！めんどくさいわけないじゃないか！ちゃんと苦労もしたんだぞ！！

初日は大変だったぜ、なんとたって食糧がなかったからなく『チート能力』の『物質具現化』で携帯食料が創れなかったら

今頃ミイラだもんなく。そうそう、『物質具現化』では食べ物を創れたは創れたけどできるのはソ。ジョイしかできなかったのが不思議だな、糞神が好物だったのかな？

まあそのあとはいたいは順調だった。水や火は『知識』で得た魔法の練習も兼ねて創り出すこともできた。

『知識』で得た魔法の説明では魔術と魔法の二種類がこの世界にあるらしい。主に教科書に載っていて

初心者が使っ模範的なものを魔術と呼んでいる。魔術の特徴は詠唱が短く、魔力消費量が少なく、誰が使っても威力が

変わらない点だそう。まあ逆に言うと誰が使っても威力は上がらないだけだな…

魔法はそのほとんどがオリジナルで主に熟練者が使っているそう。

魔法の特徴は詠唱は長いが熟練になると無詠唱ができるようになる、魔力消費量が魔法の創り方によってかわったり、使う者のイメージ力で威力が変わったりする点だ。だが熟練者になるとほとんどの者が魔法を使うようになるらしい。まあ魔法のほうが便利だからな！だから必然的に魔術が練習に魔法が実用になるそうだ。

あと、俺が使える魔法の中に概念魔法というものがある。たぶんこれは俺しか使えないのではないだろうか？

いや、根拠はないんだけどね、なんかねえそう思うのよ。

んまあその概念魔法は「こういう魔法」という概念をそのまま出す魔法だから厳密に言うとはこれは魔法じゃないのだ！

この概念魔法はイメージ力が全ての魔法とも言える。しかも、概念魔法はなぜか世界の魔力を使うので相手に魔力を認識されない魔法だったりする。

あと魔法に必要な魔力は、こう…手に気合を込めてみたら何かが出てきたような感触が手に伝わってきた。

『知識』と照らし合わせるとこれが魔力であることが分かった。…気合を込めたら出てくるって……どうなのよ……

まあそれは置いて、『知識』ではこの世界にはステータスカードなるものがあるらしく、そのカードが身分証明書の役割を果たしているらしい。そして、そのカードがあるだけで国の出入りや皆の通過、宿の割引や武器屋の割引ができるらしいのだ！しかもそのカードには自分のステータスが逐次更新されながら表示されるらしい！カードは表に自分の身分証で裏にステータスが表示されるらしい。

だがこのカードは国が発行を管理しているらしく簡単には入手でき

ないのだが…そこは俺の『物質具現化』で修行の合間に創ったのさ！

——実は見たことがないものでも創れるのか心配だったが、見たことがなければ創れないということはないらしく、

十分な知識があれば創れるようだった——

んでから、カードは創った状態のままでは何も書かれていないただのプレートみたいだったが、俺は手に持って

プレートに魔力を流してみた。すると、プレートが淡く光ったと思うたらすぐにただのプレートに戻ったが、よく見ると

うつすらと文字が書かれていた。しばらくすると、はっきりと文字が見えるような状態になっていた。

プレートの表面にはこちらの世界——アストティラン——の言葉でこう書いてある…

名：ジェイク・G・フリード

種族：人間

身分：冒険者

性別：男

ランク：F

発行元：ブロム・セイム

と書いてある。当然名前は偽名で登録している。まあ本名は向こうの世界の名前だしな。こちらの世界に早く慣れるためにも

こちらの世界の名前を考えて自分になずけてみたら以外や以外、成功してしまったのだ。

ちなみにジェイクは死んだ親父がなずけてくれた俺の英名で、G・

フリードはジークフリードを改変してみたのだ。

そいでから、ランクはF→Sまであるらしくランクは登録者がギルド——やはりファンタジーの世界、ギルドがあった。が

この世界のギルドの仕組みは一般的？で、雑用から大型の魔獣の討伐等のクエストの仲介屋のようなものだった。

クエストにもランクがあり、同じランクかそれより二つ上のランクしか受けられない。という感じ——でクエストを受けると

同じランクなら十回、一つ上なら五回、二つ上なら一回成功するとランクが上がる。という仕組みのようだ。

んで、裏面のステータスには…

魔術・魔法適性：『炎』『嵐』『雷』『地』『闇』

戦闘タイプ：万能殲滅型

クラス：万能師

傾向：拳闘魔法士

ステータス：ジェイク・G・フリード

基本体力：B

基本攻撃力：S

基本魔法火力：SSS

基本防御力：A

基本魔法障壁：SS

基本魔力総量：多量により測量不能

基本瞬発力：A

基本精神力：多量により測量不能

基本運：B

……途中まででこれだよ…もう『チート能力』が無くてモチートじやん!!魔術・魔法適性なんて一人二つあればすごい方なのに五つもあるし!しかもその内一つはいかにも魔王の『闇』だし!

それだけじゃなく戦闘タイプが万能殲滅型ってクラスも万能師だし…いや、これは納得できるか?

修行中にダイオラマ球のステータス弄って仮想敵をバンバン出してそれを殴り飛ばしたり、魔法で蹴散らしてたしな…

うん!こいつは自業自得だわな…はあ…orz

うん…問題はこれだよな。なんか糞神のところで調べた時より項目が増えてるし…いや、これはいいのか、だめなのはあれだよ…

あれ…魔力総量と精神力だよな、何だよ多量により測定不能って…

これ…もう魔王よりやばいんじゃないかね?見つかれば次第殺されそうな感じだな。うん、もう考えるのやめよっと!

あ〜でも一応説明しといたほうがいいか…ん?だれにかつて?そりゃ〜気にしたら試合終了ってことで…

そいじゃ、えつと攻撃力と魔法火力は物理か魔法かの違いで防御力と魔法障壁も同じ。

魔力総量と瞬発力、は読んで字の如くで、精神力は魔術や魔法のコントロール力と言ったところかな?んで、運は神への注目度で高ければそれだけ注目されているわけで危なくなったり、運がよくなりたいたとき等に稀に神が助けてくれるというもの———そういえば言うのを忘れていたけどこの世界には本当に神がいるのだ。ちなみにあの糞神はこの世界での最高神だったりする。

元の世界にいた理由はしらないがな。———

次は属性のことを、魔法は属性が結構あつて

初級が「火」「水」

下級が「風」「木」「土」

中級が「炎」「氷」「毒」「電」

上級が「嵐」「森」「地」「腐」「雷」

根源級が「光」「闇」

という属性がある。さらにその属性一つ一つに初・下・中・上・古代級というのが存在して古代級になるほど威力が高くなったりするんだおもに初級から下級が魔術。中級から根源球が魔法と呼ばれていたりする。

これらを組み合わせたりそのまま使ったりするのだ。それで、根源級は基本的には全ての者が「光」らしいのだがときたま

「闇」を持った人がいるらしい…俺もなんだがな…まあ、その「闇」の人たちは少なかったので何者なのか知られてないらしい。

んでから、魔術・魔法適性が一番高い属性の色が髪の色になるみたいだ。つま、面倒だし色の説明は後にしよう。

あとは、スキルと称号か、これもまたチートなんだよな…

ユニークスキル

異世界者 LV・MAX

全てのステータスを2段階強化

ユニークスキルを1つ無条件で習得

条件を満たせばさらに追加で習得可能。

ユニバーサルライブラリ
万能図書館 LV・MAX

基本精神力を5段階強化。

一度でも見たことのあるもの、見たものを半自動的に解析し記憶領域に保存する。

記憶領域に「魔導書」「武器図鑑」「防具図鑑」「道具図鑑」「家具図鑑」「食物図鑑」「植物図鑑」「魚図鑑」「魔物図鑑」「幻想図鑑」「人物履歴書」「聖書」「歴史書」「教養書」「地図帳」を創る。

魔法を解析した場合、記憶領域の「魔導書」に保存される。

「魔導書」に保存された魔法は任意で発動できる。

「魔導書」に保存された魔法のステータスが見れる。

この保存された魔法はその魔法の概念魔法になる。

武器、防具、道具、家具、食糧、植物、魚を解析した場合、記憶領域の「武器図鑑」「防具図鑑」「道具図鑑」「家具図鑑」「食物図鑑」「植物図鑑」「魚図鑑」に保存される。

「武器図鑑」「防具図鑑」「道具図鑑」「家具図鑑」「食物図鑑」「植物図鑑」「魚図鑑」に保存された物は任意で出せる。また、出現場所も決められる。ただし、魚の場合は死んだ状態で出てくるが鮮度に問題はない。

「武器図鑑」「防具図鑑」「道具図鑑」「家具図鑑」「食物図鑑」「植物図鑑」「魚図鑑」に保存された物のステータスが見れる。

この保存された物に数の制限はない。

魔物や魔獣、人間や魔族等、幻獣や幻想種等を解析した場合、記憶領域の「魔物図鑑」「幻想図鑑」「人物履歴書」に保存される。

「魔物図鑑」「幻想図鑑」「人物履歴書」に保存された魔物や魔獣等、人間や魔族等、幻獣や幻想種等のステータスが見れる。

この保存されたステータスは常時更新される。
魔物や魔獣等、幻獣や幻想種等なら生態や弱点などが追記表示される。

人間や魔族等なら今までの履歴や思考などが追記表示される。

「聖書」「歴史書」「教養書」は現在いる世界で関連している全ての知識が保存される。

この「聖書」「歴史書」「教養書」は自動で更新、保存される。

自分の視界に入る地形や街などを「地図帳」に保存する。

「地図帳」に保存されたら任意で閲覧できる。

「地図帳」は自分で書き込み可能

また、この ユニバーサルライブラリー 万能図書館 で出した物のステータスを一部改編が可能。

さらに、出した物は念じれば消すこともできる。

スキル

称号

異世界からの放浪者

全ステータス2段階強化。

状態異常無効。

身体強化。

万能図書館を総べる者

文字などを読む速度が速くなる。

読み込みが速くなる。

呑み込みがすごくよくなる。

うん！チートだぜ！！ていうかユニークスキルが二つって（笑）ユニークスキルは基本的には一人一つだけらしいのだが…

異世界者 で条件満たせばさらに手に入るのかよ！すげーな！！
そうじゃなくても 万能図書館 ユニバーサルライブラリー はマジチートなのによう！もう笑いがとまらねーぜ！！

ふふふ、「ふははははははは…」

～30分～

ふう、少し暴走しちゃったな…まあ、これでスキルはいいでしょう。

……うん、改めてみると凄まじいな。もう俺最強なんじゃね？

修行の成果で生身のままで某魔法先生の狗族の子供並に強いしな…強いよな？たとえば微妙だったか…

ふう、さあて出発のそろそろ出発の準備を始めつか！！

第二話 修行の終わり、ステータスカード、出立の準備（後書き）

ここまで読んでくださいてありがとうございます。

間違いや文章がおかしいところがありましたら教えてください。

第三話 出発準備（前書き）

これおかしくね？という疑問を作者感じましたがそれを無視しながら暴走します。

……伏字はどうしたらいいんでしょう？

第三話 出発準備

「さて、どういう装備にしようかな」

ただいま俺は、自分の装備をどういうものにするか検討中だったりする。

「この世界の文明レベルは中世並だから近代装備はないとして…やはりここは某狩猟ゲームの装備で行くか。」

そう、この世界の文明レベルは『知識』によれば科学の皆無でほぼ魔術・魔法の中世並の世界らしい——っていうか、魔法なんかがあるファンタジーの世界ってほとんど文明レベルが中世だよな——
——ほとんどの武装する人たちは鎧などの装備らしいのだ。

「ということは、それっぽく見えるガレオスシリーズか？デスギアなんかもいいよな？ナルガは…あれは回避主体か…
もしくはベタにギアノスシリーズか…よし、あんまり目立ちたくないしな！修行で使ってたハンターUシリーズにしよう！」

そうと決まればさっそく

「スタート展開、マテリアライズ物質具現化、タイプ形状：ハンターUシリーズ！」

というと、俺の体が輝いたと思うと次の瞬間には今まで来ていた服の代わりにハンターUシリーズを身につけていた。

…これ、鎧や服を『マテリアライズ物質具現化』するたびに思っただけど今まで着ていた服はどうなんだろ？

感触的に今まで着ていた服とは違うってのがわかるけど…まあ、考

えたところでわからんしなもういいや。

と、そう思っていると視界の端にステータス画面二つ出ていた…え？二つ？…なんで二つも出てるんだ？今までは一つだけだったのに不思議に思いながら見てみるとそこにはやはり日本語でこう書いてあった…

『ステータス変更可能、変更しますか？はい／いいえ』

といういつもの画面と

『ユニバーサルライブラリー 万能図書館より、現在「ハンターUシリーズ」を解析中：17%』

と書かれていた。…なるほど、これが『ユニバーサルライブラリー 万能図書館』ね、ということとは、これからは
こっちから出した方が怪しまれないかな？…ふむ、それなりに時間がかかりそうだから先にステータス変更を済ましとくか…

『ステータス変更画面：ハンターUシリーズ』

防御力：540 / 1900

変更しますか？はい／いいえ

耐久力：1080 / 3800

変更しますか？はい／いいえ

付加属性：無

変更しますか？はい／いいえ

スキル：千里眼・ボマー・睡眠倍加

残りスロット：4
変更しますか？はい／いいえ

…さ、最終強化までされてんよ…しかもさらに強化できるみたいだし…付加属性つてあれか？鎧に属性を持たせれるのか？…
あとスキルも変更できるんだ…ま、まあとりあえず変更してみますか。

『ステータス変更画面：ハンターUシリーズ

防御力：1900

耐久力：3800

付加属性：地

スキル：千里眼・心眼・業物・抜刀術・高級耳栓・ランナー
残りスロット／1

「よし！こんなもんでいいだろ！」

『知識』のよればこの世界の全身甲冑フルプレートアーマーの防御力は900あたりだそうだ。だからこのハンターUはその倍以上

の防御力を持っているってことだな…なんか付加属性の地のおかげで布の部分も甲冑以上に丈夫だしな剣で斬る程度じゃ傷一つで
きない防具になってしまったな…だがしかし！俺は後悔も反省も
ないぜ！！

あとスキルは変更しようとしたら別の画面が出てきてそこにスキル
が一覧表になっていましたよ。一覧表に書かれたスキルを押して
みると、押したスキルが追加されていたぜ！睡眠倍加は押してみた

ら『削除しますか？はい／いいえ』という画面が出てきたから
削除したぜ！！この防具を着ていたら並の敵じゃそうそう負けない
な。これで防御面はいいとして次、武器を創るか…

「っけていてもな…某狩猟ゲームではずっと浪漫槍だったしな…流石
にこの世界じゃ目立ちそうだからな…あまり目立たない武器を
使いたいな…うん、『知識』でもどの武器が目立つとか目立たな
いとかわからんし…一応クラスの傾向が魔法拳闘師だしな、
ナックル系統にしようか。ってかそんな武器俺知ってるかな？『知
識』ではここには拳闘師がいないしなあ…うん……………」
っあ、あつた、よしこれにしよう。

「スタート、マテリアライズ、タイプ
展開、物質具現化、形状：アムルテン」

そういうとハンターUのグローブの部分が輝き始め次の瞬間には、
グローブがアムルテンに変わっていた。

この武器は某魔界戦記に出てくる拳系の武器で最強の武器だったと
思うが、まいいや。

アムルテンの見た目は某流浪剣客に出てくる無敵流の手甲に似てい
て手甲は手の外側に隙間なくついているが、手を動かすのに
邪魔にはならなかった。内側はハンターUの布の部分ようで違和感
などは全くなかった。

~~~~~この形状は筆者の願望と独断で決めました。~~~~~

ん？いま電波が受信されたような気が？……まあ気のせいだろう。  
俺はアムルテンのステータス画面変更をした…

『ステータス変更：アムルテン』

体力：1000 / 1000

魔力：400 / 400

攻撃力：3600 / 3600

防御力：300 / 300

精神力：100 / 100

魔法障壁：200 / 200

命中率：500 / 500

瞬発力：3600 / 3600

付加属性：嵐

スキル：——

といった具合に変更した…というよりもほとんど変更できなかった。数値はもともと限界値だったしスキルは付けること

ができなかった。唯一できたのが付加属性。「嵐」をつけ試に正拳突きを湖に向かって突いたら、「気」の遠当てのような

感じで拳大の空気の塊が突いた拳から飛んで行って対岸の木を一本、木の中ごろからへし折ってしまった。

……ここから向こうの木までだいたい300m、木の周りは大人2〜3人で囲めるぐらいの大きさ……危険だな…付加属性は

「嵐」にしとこう……

そのあと俺は多機能サバイバルナイフを2本、投げナイフを10本、  
万が一のためにデザートイーグル1丁とマガジン2本それを  
装着するためのベルトを1つ、顔を隠せるフードが付いている漆黒  
のマントを1着創り装備した。そのあと30本のソ。ジョイ  
と野営道具一式、釣り道具一式、医療道具一式、砥石、方位磁石、  
そしてそれらを入れる、ブラックホーク製3Dバックパックを創り  
その

中に入れた。あと、マントのステータスに関しては、ほとんど何も  
なく、スキルスロットが2つあるだけだったが顔を隠すのが  
目的だったので大して気にせずスキルの暗幕と狙撃防止を付けて  
みたのだが、

この2つのスキルは『能力開発』で創ったスキルだ。暗幕はマント  
の内側からの光を遮断するという効果で、

物質具現化の発動時発光するのでそれがばれないようにするために  
創ったスキルだ。狙撃防止は100m以上

離れたところから見ると5人ぐらいにぶれて見える。というスキル  
で弓矢で狙撃されるのは怖いなというチキン根性で創ったスキル  
だったりする。まあこれは便利そうだしな、別にいいんだよ！いい  
のだよ！！

そっぴゃ、  
書館  
の解析どうなったかな？と思い  
万能図

の解析画面を表示しようと思った時に…

ポーン

という音が聞こえたと思ったら 万能図書館 の解析画面が表示さ  
れた。そこには…

『万能図書館解析終了報告』

## 解析物

- ・ハンターUシリーズ―終了
- ・アルムテン―終了
- ・多機能サバイバルナイフ―終了
- ・投げナイフ―終了
- ・デザートイーグル及びマガジン―終了
- ・50AE弾―終了
- ・多機能ベルト―終了
- ・黒マント―終了
- ・ソ。ジョイ―終了
- ・野営道具一式―終了
- ・釣り道具一式―終了
- ・医療道具一式―終了
- ・砥石―終了
- ・方位磁石―終了
- ・3Dバックパッカー―終了

解析情報を各分類に整頓し保存します。』

と書かれていた。ふむ、保存されたら好きな時に出したり消したりできるんだったよな…となると、『物質具現化』で出してから

ユニバーサルライブラリー

万能図書館 に保存してそこから出した方が万が一の時も言い訳ができるよな…よし！今度から

は保存された物は『物質具現化』ではなく ユニバーサルライブラリー 万能図書館 から出す

ようにしよう！

…とそんなことを思いながも俺は出発の準備を進めていた。

### 第三話 出発準備（後書き）

此処まで読んでくださいましてありがとうございます。

バックパックの容量おかしくね？という疑問、筆者も感じますがそこを気にしたら  
負けということですよ。

まあ、無理やり入れたりバックの側面に付けている。という感じでしょうか。お願いします。

非難なんでもいいんで感想をお願いしますです。はい。

## 世界設定其の1（前書き）

世界設定です。

## 世界設定其の1

### 異世界アストティランの世界観

#### 種族

人間：一番数が多い種族。魔術・魔法に関する知識や技術は全属性知っているがあまり詳しくない。一部の人間が詳しかったりする。主に王国を造りそこで生活している者がほとんど。人間の国は多数ある。他種族に関しては排他的である。稀に他種族の領内に住む者がいる。政治は王政で王もいれば貴族もいる。世襲制である。奴隷が認められている。治安はそこそこ。

人間の多数ある王国の中でリーダー的な立場の国の名前はギラステイラン王国という。

現在は魔族と敵対中。

亜人：2番目に数が多い獣の力を持った種族。魔術・魔法が種族全体で使えないが、他種族と比べると身体能力が段違いである。基本的に人間以外種族とは友好的である。人間とは戦争を仕掛けられたり奴隷にされたりしているので種族全体で嫌悪的である。部族ごとに集落で分かれているが、王都だけは多数の部族が入り混じっている。政治は王政だが選挙のようなもので王が決まっている。奴隷は禁止されている。亜人という全体名は人間が勝手につけたため嫌っている。

亜人の唯一の王国の名前はグロウステイア王国という。

現在は中立的立場である。

神族：そこそこ数が多い天使のような種族。神聖魔法を主に使って

いる。頭には『光の環』というリングが浮かんでいる。『光の環』はいわゆる演算機器のようなもので、神聖魔法の補助装置として進化の過程で手に入れたといわれている。背中には髪の色と同じ色の『羽』が生える。神族は主に明清色の髪が生える。当然空を飛べる。自分たちは神の使いの『天使』であると信じている。魔族以外とは比較的友好である。政治は教会の教皇が行っている。神聖魔法と信仰心が強ければどの種族でも教皇になることができる。

神族はこの大陸唯一の宗教国家で名前はバルグラムシエル教国という。

現在は魔族と敵対中。

魔族：それなり数が多い悪魔の外見をしている種族。獄黒魔法を主に使っている。典型的な悪魔や鬼等の姿をしている。種族ごとに特殊能力を持っている。種族全体を通して武闘派が多い。身体能力も亜人並にある。不死的存在が多数存在している。数は少ないが間違いなくこの大陸最強の存在である。武闘派が多いが戦闘狂というわけではない。戦わないでいいなら戦わない、というのが種族全体の考えであるが、売られた喧嘩を買う。というのも種族全体を通じての考えである。温和で大柄な性格である。政治は実力主義がもつとつで、武官は腕っぷし、文官は頭脳が物を云う。王は魔王と呼ばれ両方が優れているものがなれる。代々の魔王は、善政を行っていて善き人格者である。邪神宗教などは行ったことなどない。魔族は帝国で名前はグリバルス帝国という。

現在は人間と神族と敵対中。

妖精族：どこにはいる数が不明の妖精のような種族。主に精霊魔法を使っている。典型的な手のひらサイズの妖精や人間大のエルフなどがある。霊的場所や神域などに居て滅多にあえない種族。身体能力はあまりなく、魔術や精霊魔法などが主体の戦い方。他種族とのかかわりを持たないので詳細は不明。

王や国はない様子。

現在はここ300年ほど目撃例がない。

## 地理

大陸名：ガンベルファル

大陸南：ガラスティラン王国他、の人間の国が集まっている草原地帯

大陸東：グロウスティア王国と各部族の亜人が集まる森林地帯

この最東端のティディース二の森の中央付近にある森唯一の水源の湖の北端にいた。

大陸西：ブルグレムシエル教国がある霊山グルブロスの山脈地帯

大陸北：グルバリス帝国がある資源が豊富な総合地帯―草原、山脈、森林―

大陸中央：冒険者の聖地にして全ての種族が集まる。迷宮自治国ブロム・セイム。

ブロム・セイムは迷宮を中心に栄えた4国公認の自治国でこの大陸で唯一全ての種族に会える

国である。迷宮は一か月に一度、その日の0時になるとその構造を変化させてしまう。魔物や魔獣が

無尽蔵に出てくる場所だが、その危険分のお宝が大量にあるので迷宮に入る冒険者は後を絶えない。

## 魔術・魔法

初級が「火」「水」

下級が「風」「木」「土」  
中級が「炎」「氷」「毒」「電」  
上級が「嵐」「森」「地」「腐」「雷」  
根源級が「光」「闇」

初級〜下級が魔術で中級〜根源級が魔法と呼ばれている。

魔術が初心者用で慣れてきたら魔法を使う。

魔法の属性には1つ1つにさらに階級づけがされており下から、下級、中級、上級、古代級となる。古代級は根源球よりも扱いが難しい。その昔、古代級魔法が暴走して国が1つ滅んだという記録がある。

その者の一番高い属性の色が髪や目に出てくる。オッドアイの場合3つ以上あることになる。そのときは髪は一番多い属性の色になる。

「火」が赤  
「水」が水色  
「風」が黄緑色  
「木」が緑色  
「土」が薄茶色  
「炎」が朱色  
「氷」が藍色  
「毒」が紫色  
「電」が黄色  
「嵐」が翠色  
「森」が深緑色  
「地」が黒茶色  
「腐」が灰色  
「雷」が白色  
「光」が金色

「闇」が灰黒色

となっている。基本的には髪の色と瞳の色の2つの属性を持っていることとなる。髪も瞳も一緒だった場合その属性の威力が上がる。

スキル

ユニークスキル：生まれた時にしか会得できないスキル。個人が持つていたり、種族が持つていたりする。

ユニークスキルにはLVがあるが最初からLVは最大値である。

スキル：特定の条件を満たすと手に入るもの。神が人に授けているとも言われている。それなりに手に入る。

スキルにはLVがあり最大が5〜10までLVを上げることができる。

称号：特定の条件を満たし多くの人にそのことを知ってもらうか、神に認められたら手に入るもの。そうそう手に入らない。

## 世界設定其の1（後書き）

だめな点や、おかしな点、文章がおかしいところや、言葉がダメなところがあれば

感想のところにお願いします。

……さて、ヒロインをどうしたらいいでしょうか？

奴隷から助けるか…それとも道中で襲われているところを助けるか？

うーん、迷います。

この考えが固まるまで更新しません。

まあ、そういつても次の日に更新するかもしれないんですがね（笑）

#### 第四話 準備万端？いざ出発、奴隷狩人、初めての殺人、奴隷の少女（前書き）

難しいですねえ心理描写と戦闘描写

……ふふふ、心理描写？なにそれ？おいしいの？

#### 第四話 準備万端？いざ出発、奴隷狩人、初めての殺人、奴隷の少女

「さて…っと、こんなものかな？」

俺はあの後、『知識』を頼りに薪になりそうな枝や薬草、食べられるキノコなどを採集し、バックパックや新たに創ったベルトに付けるタイプのポーチに入れていた。

「大体こんなのもでいいかねえ？…うん、もうこれでいいや、いい加減めんどくさくなってきたしな。」

今は太陽の傾き具合から大体昼ごろだということが分かった。俺が此処着いたときは夜明けの前ぐらいだったから…約6時間ぐらいここにいるいろいろしていた事になるな…

「ふう。まあ自分の能力の確認や制御もできるようになったし、装備もそれっぽく見えるし、ここから一番近い街に行っても

大丈夫よな？うん、大丈夫大丈夫！心配ナッシング！うし、そうじ

ユニバーサルライブラリー  
や 万能図書館 の『地図帳』

で現在位置を確認して…と…」

俺は『知識』で得たこの世界の地図をインプットした ユニバーサルライブラリー  
万能図書館  
の『地図帳』で現在位置

を確認してみる…ふむ、この森は大陸の最東端にあるのか、んでこの森の中央付近にある森の唯一の水源の湖の北側の湖畔が

現在位置だ。此処から一番近い街はここから西へ？先へ進んだところ

に村があるのか…うゝむ、だけどなゝここら辺は亜人族

が住んでいる大陸の東側で、亜人たちは人間に嫌悪感を抱いている  
って『知識』にもあったからなゝ…どうしよ、此処から村に行くか、

それとも村を素通りして中央の自治国のほうまで行くか？

「うーん、まあとりあえず村まで行ってみてそれから考えるか……。殺されそうになっても全力で——もちろん『チート能力』を使って逃げてほしいだけだし……。うし！んじゃ行くか！！」

そういつて俺はこの森から抜けるために森の中に入っていた。

〈2時間〉

「はあ、はあ、はあ、ふう。やっと抜けたか。あゝ疲れた。」

俺は森の中をサバイバルナイフで斬り進みながら、やっとの思いで森を抜け、かなり広い草原っぽいところにいた。

俺は途中、腕時計を創るのを忘れていたので創ったぐらいで、魔物や魔獣に襲われる。といったこともないまま森を抜けることができた。

…『知識』では森には魔獣や魔物の住処があり、エンカウント率が高い地域であったけどここには1匹もいなかったな。この森が特別なのかな？…はあ、今更考えたって解るもんじゃないし、思考放棄ってことで今は街に行くための街道に出ることに専念するかな。このまま真っ直ぐ行ったところに近くの村まで続く道があるみたいだしな。

「うし！がんばろう！」

〈?????side〉

「う、う、ひぐ、ぐず、」

…暗い、寒い、痛い……

「っひぐ、ぐず、っぐず、」

私はなんでこんな目に合っているんだろう…

たしか、そう、今日のお昼頃だったはずだけど…

お母さんと一緒に近くの森に薬草を取りに行ってたんだけ…

森についたらお母さんと二手に分かれて薬草を取っていたら、声が聞こえてきてそれから…

っ！…そうか、私、人間に捕まったんだ…

私、どうなっちゃうんだろう…

カチャリ

…首輪がある…奴隷にされちゃったんだなあ…

いや…だなあ

「っひつぐ、ぐず、う、う、」

神様、お願いします、助けてください…

お願い…だれでもいいから…

「……………助けて」

「???? side out」

「時は少し戻る」

「優輝 side」

「…っお！道だ！」

俺は、先ほどいた場所からさらに2時間ほど真っ直ぐ西へ歩きやつと街道らしき道に到着した。すでに現在時刻は5時を少し過ぎているぐらいの時間である。

…ふむ、『地図帳』で現在位置と目的地を比べてみるとあと2?ぐらいか、亜人は人間を嫌っているみたいだから夜に行っても門前払いもしくは最悪、殺されちゃうだろうなあ、ふう、しゃない一応ここら辺は大丈夫そうだな。

そう思いながら俺は野営の準備のためにまず道沿いの草原にバックパックを地面に降ろした。

「ふむ、そろそろ日が沈むかなあ…たき火でも起こすか…」

この世界は大半は季節の変化がほとんどなく一部の地域でのみ気候が変化するようで、この地域の日の沈みはだいたい7時ごろだそうだ。

…俺はバックパックの外に括り付けていた半分程の枝を取り出し、

適当に草を抜いて作ったたき火の場所に枝を組んだ。

「よし、あとは着火だな。…魔法で行けるか。」

俺は枝に火が着火するようイメージを浮かべながら威力を落とした「炎」の魔法を使った。

「炎よ、」

そういうと、枝に…

っぽ

つと蠟燭程度の火がついたと思うと、すぐに燃え上がり一般的なたき火位の日の大きさになった。

まだ日は沈んでないが夜になると何も見えないだろうし、なにより夜は魔獣や魔物のテリトリーだ。今のうちに警報装置や迎撃用トラップを配置しといた方がいいな。

そう思い俺はたき火とテントを張るところ、街道沿いを除いた半径100mぐらいに警報装置と迎撃用のトラバサミや落とし穴などを創っていった。

…うん『チート能力』フル活用したら15分ぐらいで完成したぜ！これならそれなりの数の敵が来てもトラップで十分足止めできるな、と思いながら、テントを建てようと骨組みを組み立てていると、西方面の街道からなにかが土ぼこりを上げながら進んでいるのが分かった。しばらく眺めていると、それが馬車であることが分かったが…

「…魔物の類じゃなかったら俺には関係ないかな？」

うーん、…あれに関わるとなんだかめんどくさい事になりそうな予感がすんだよね

あー、どうしょ？まあとりあえずテントでも立てるか。

そう思い俺は作業に意識を戻し、テントを組み立てようとしたが、だんだん騒がしくなってきたので馬車があつた方角をみると、すぐそこまで馬車がいているのに気が付いた。

馬車の形状は某龍な依頼のゲームで出てくる幌馬車によく似ていた。  
…問題なのはその周りにいる馬に騎乗した人間たちの方だな。

馬車の業者含め周りにいる人間6人、全員の服装や外見が、the 盗賊みたいな奴らばかりで業者以外の全員が弓矢や長剣で武装しているの

だ。そして、全員が体のどこかに眼の刺繍がされたバンダナを付けて、顔にニヤニヤと嘲笑を浮かべていた

…こいつらの身なりや武装、団旗と思われし眼の刺繍のバンダナ、そして亜人の国なのに人間がいる。こりや典型的な盗賊かなあ？

さて、どうするかな？…できれば殺し合いなんかしたくないが奴さんやつこが来たらそうも言えないしな、最悪殺しも視野に入れて

行動しなければならぬが…ここは『チート能力』を使って一気に捕縛するか？…とりあえずは、捕縛を第一に考えておこうか…

と、いろいろ考えていると…

「よお！兄ちゃん、こんなところに居たらあぶないぜ！俺らみたいな奴隷狩人どれいハンターに目え付けられて奴隷にされっぞ！」

「ぎやはははは！おいおい、そんなこと言って希望を持たせんなよ、そんなこと言ったら俺らが捕まえないみてえじゃねえかよ！」

「ぶははははは！そうだぜ！言い方が間違ってたんだよ！」

「おい！俺様が改めて言ってる！抵抗せずに俺たちに捕まるんだ！そうしたら殺しはしねえよ！殺しはな！」

「テメーには俺たちの奴隷になってもらうぜえ！ああ！安心しな尻は掘ねえからよぉ」

「「「「「ぎやははははは！！！」「「「「「

…こいつら…奴隷…だと…

俺は「奴隷」という言葉を聞いた瞬間に「捕縛」という考えが吹っ飛んでいた…。

「…………ふざけるな」

「ああん？」

「ふざけんな！！！！！」

「んだごら！」

「こつちは無抵抗なら殺しはしねえつつてんだよ！とつとと捕まれやゴラァァ！」

「はあ？奴隷？ふ・ざ・け・ん・な、このド阿呆どもがあ！！貴様らに何の権利があつて他人の人生踏みにじるようなことしてんだ！ああ！貴様ら程度のふざけた人間が他の知ある者を捕まえ奴隷にするだあ？貴様らは何様だこの野郎！！貴様らみたいな人間はなあ、

俺が一番嫌いなタイプの人間なんだよ！！…俺を捕まえて奴隷にするだろ、ふん！俺より弱い奴らに俺が捕まるわけが無いだろうがこの脳筋のど阿呆共が！」

「ああ？」

「お前、生きれると思うなよ…」

「っは！貴様らこそ生きて帰れると思うな！」

「っテメー！おい、もう構うこたねえ、ぶっ殺せ！それからこいつの身ぐるみを剥げ！！」

「……「おお」「……」

…俺は今、堪忍袋の緒が「バツン」という擬音とともにぶち切れていた。

奴隷だあ？…許せねえなあ、100分の80殺しにしねえと到底許せねえぜえ！！奴隷なんて言葉は俺の嫌いなワード、トップテンに入る

ぐらい許せねえ言葉だからなあ！

「来いや！逆にテメーらの身ぐるみを奪ってやるよ！！」

俺は『チート能力』の5つ目の能力、『2次元・身体能力、特性模写』で某魔法先生の学園広域指導員の身体能力と特性をコピーし、即両手をポケットに突っ込み即座に…

「居合い拳!!」

俺は居合い拳で奴隷狩人どもの肩や脛などを本気で撃っていった。俺は落馬をさせればいいと思いい急所を狙わなかったが、強化された自分の身体能力+模写の力により結果、賊共の肩や脛は抉れ、肉片や血、砕けた骨や腕や足などが宙に舞い地面へと落ちて染みになっていく、賊共は吠え、喚き、助けを求めているうめき声が聞こえてくる。だが、その声は俺の耳には入ってこない、耳鳴りがひどく、近くで飛行機のエンジンでも稼働させてるのじゃないかと思うぐらい耳鳴りがひどくなっていく。っと、突然耳鳴りが無くなったかと思うと、

今度は吐き気がこみ上げてきた。何度もこらえようとするが体はいうことを聞いてくれない。たまらず俺は地面に膝をつき四つん這いになりながら、吐いた。胃の中が空っぽになるぐらいに、内臓が出てきそうな位に吐いた。吐き気が次第におさまってきたので四肢に力を入れて立ち上がった。大量の人の血や肉などを見てしまったから多分ショックを受けたのかな?とどこか他人事みたいに思いながら賊共の方を見てみると、賊共は全員死んでいた…

…ああ、俺が殺したのか…お、俺は人を殺してしまったのか……いや、これでよかったんだ…こんな世界だ、遅かれ早かれいつかはこんな賊共のような連中に会い、そして、殺していただろうからな…これでよかったんだ。

「ああ…そうだ、俺はお前らを殺した。だが怨むなよ、お前らは俺を殺そうとしたんだ。逆に殺されたとしても、それはお前らが悪いんだからな。……馬車の荷台を調べてみようか…誰かが捕まっているかもしれないからな…」

俺は、おぼつかない足取りで馬車の荷台まで歩く、途中業者役の賊の死体から荷台の扉の鍵を探っているときに、また吐いてしまったが出たのは胃液だけだった…。鍵束はすぐに見つかった。なんかたくさん付いているが気にしない。俺は、なんとか荷台にたどり着いた俺は荷台の扉を開けてみた。すると、奥から泣き声を押し殺したような声が聞こえてきた。俺は力が入らない体に喝を入れなんとか荷台に這い登って奥を見てみた、隅の暗がり小さな女の子がその体をさらに小さくするように、体操座りで泣いていた。俺は何とか脚を動かして少女のすぐ近くに来了。少女は俺に気づいてないようだったが今は関係ない、俺は少女の首についている革の首輪についている南京錠を確認した。そして、その南京錠に合う鍵を『知識』から探す。鍵はすぐに見つかった。俺はその場に屈み、少女の様子を見してみる。服はあまり汚れておらず、女の子っぽい服装だからおそらく、賊共には辱められていないだろう。俺はそれだけを確認すると、鍵を南京錠に差し込み、そして外す。

外した瞬間に少女がこちらに顔を恐る恐る向けた。俺は少女の手枷、足枷を全て外し少女を見た。少女は床に転がっている革の首輪と鉄の枷を見て「なぜ？」と言いたそうな顔で俺を見ている。

俺は少女の様子を改めて見てみた。

少女の髪はこのような空間でも淡く水色に光っているように見える。眼は泣いたせいか充血しているが、瞳の金色が綺麗に輝いている。顔は暗がりでもよく見えないが童顔のような感じだと思う。肌はきめ細かそうですすべすべしていそうだ。

「お前、綺麗だよなあ…」

俺はこの時、疲労かストレスかわからないが頭の中に黒い靄が生まれている。その靄がだんだん濃くなって視界を覆い尽くそうとする前に、その一言を言って力尽きて倒れてしまった。

〈優輝 side out〉

「???? side」

私、アリアステイルは小さいころから「人間は野蛮で危険な種族だ。」とか「人間は儂らを卑下しとるが、人間こそが儂らより下の者じゃ。」と教えられてきた。お祖父ちゃんもお祖母ちゃんも両親も兄弟も友達もみんなが人間のことを嫌っていた。もちろん私も、けど、村のはずれに住んでいる伯父さんは「人間の中には悪い奴もいるし、いい奴もいる。一概に悪だとは思えない。」と言っていた。私は伯父さんの言葉が信じられなかった。人間たちは私たちを亜人と称し、村を襲い、奴隷として連れて行く。そんな野蛮な種族だからだとみんなに教えられていたからだ。

そして、私は今、人間に捕まり『奴隷の首輪』を付けられて馬車の荷台に容れられていた。

『奴隷の首輪』を付けられたものはステータスカードの身分が奴隷になってしまふ。それだけでなく、首輪を付けた者の命令に逆らえなくなってしまう。そのうえ、自殺防止の魔法が使われているので死んで楽になることもできない。首輪を外すには首輪の南京錠とペアの鍵でないと開かないのだ。

私は絶望していた。「人間にはいい奴もいる。」と言った伯父に、「人間は危険だ。」と言いながら何も対策をしていなかった村の人たちに、危険と知っていながら二手に分かれたお母さんや自分に、

そして、こんな運命を強いるこの世界に。

フッフ、もう、みんなに会えない、お祖父ちゃんにも、お祖母ちゃんにも、伯父さんにも両親にも兄弟にも友達にも、誰にも会えない。人間に奴隷としてこき使われ、慰め者にされて罵られるかもしれない。最期はボロ雑巾のように捨てられるのかもしれない。

「……っひつぐ、いやだよお、ひつぐ、そんなの、ひつぐ、うう、いやだよおお……」

私は少しでも人間から遠くへ荷台の奥の隅へと寄り、膝を抱えながら、泣いた。

………

………

………

………

………

…

しばらくして、馬車が止まったような感じがした。ああ、もう着いたのか、いやだなあ、いきたくないなあ、

声に出して泣きたかった。でも、もう声は出ない、とつくに喉は枯れ果てていた。もう涙は出ない、とつくに全て出し尽くしてしまった。

もうできることと言えばさらに隅に寄り体をちぢこませることだった。

それでもいい、何も抵抗しないよりはましだ！

私はそう思いながら隅で膝を抱えたままちぢこまっていた。外からは私を連れ去った人間の声が聞こえる。大声でなにか笑っている、

でも私には関係ない。笑い声が消えた、でも私には関係ない。私はさらに奥にちぢこまろうとした瞬間に、突然の怒声。

―はあ？奴隷？ふ・ざ・け・ん・な、このド阿呆どもがあー！貴様らに何の権利があつて他人の人生踏みにするようなことしてんだ！ああ！貴様ら程度のふざけた人間が他の知ある者を捕まえ奴隷にするだあ？貴様らは何様だこの野郎！！貴様らみたいな人間はなあ、俺が一番嫌いなタイプの人間なんだよ！！……………

一瞬何を言っているのかがわからなかった。だけどさっきの内容が奴隷という制度に対して否定的な発言ということがわかった。私はその怒声の主が私を救ってくれるのかと思った。だけど、今度は人間が怒鳴り声をあげながら一斉に何かを言っている。何を喋っているのかわからなかったが唯一聴けたのが…

―ぶっ殺せ！―

この一言で、この一言で、私の希望は無くなった。人間は6人はいただ、対して怒声の主は聞こえた限りではたった1人、これでは多勢に無勢、子供でも分かることだ。人間が怒声の主に大声を上げながら斬りかかろうとしているのがわかる。ああ、もう助かることなんてないんだ、だったら、だったらもう…

「……………もう、聞きたくないよう」

私は最後の抵抗とばかりに、体を限界まで隅に寄せ、膝を抱え俯く、もう何も聞こえない、怒声も、人間の声も、ああ、なんで、こんなことが私の身に起こるの？私は村で静かに暮らせばいいだけなのに、なんで？なんでそんな平凡な願いを踏みにじるの？……………もう、いやだよ……………

.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
しばらくそんなことを考えていたら突然……

ガチャン

私は突然のことで一瞬呆然とした。なぜか『奴隷の首輪』が外れたのだ。私は恐る恐る前を見てみると……人間が一人、そこにいた。

この人間は次々に私を拘束していた鉄の枷を外していった。私は床に落ちた『奴隷の首輪』と鉄の枷を見て自分から外れていることを再確認した。そのあと私は、私を見ている目の前の男に視線を向けた。背は私より高く、全身が隠れる真っ黒なフード付きのマントを着ている。背格好的に男であることがわかる。私を捕まえた人間の中にはいなかったと思う。ふと、この人間が私の目を見ていることが分かった。私は視線を動かすと人間と視線が重なった。兜についてあるフェイスガードで輪郭や肌の色はわからないがこの人間の目がマント

のように真っ黒であることがわかった。それは、夜の闇よりをさらに濃くしたような黒だ。

すると、突然この人間が……

「お前、綺麗だよなあ……」

「ほえ!？」

私は突然この人間にほめられて変な声を出してしまった。私は照れてしまい俯いてしまった。がそのあと…

ガシャン！

ものすごい音を上げてこの人間が倒れてしまっていた。

「ちょっと、お、起きてください！」

私は必死になってこの人間の体をゆするが起きる気配がない。

「はう、はう、ど、どうしたらいいでしょう？」

私にはもうどうしたらいいのかわからなかった。突然人間によって捕まり、突然人間によって助けられる。伯父が言いたかったのはこういうことなの？もう、わけがわからなかった。けれど、私は立ち上がった。今までずっと膝を抱えて座っていたせいか脚の関節が痛い気がしない。私は関節の痛みに耐えながら外に出てみた。外は、紅かった。その紅は私を捕まえ奴隷にしようとした人間たちの血や肉だった。

「ああ、この、漆黒の格好をしたこのお方が、あの怒声のお方なんだね…」

私は人間の死体の向こう側に、なにかの荷物が置かれているのが見えた。

この荷物はこのお方の荷物なのかな？…あそこに置きっぱなしだったら盗まれるかもしれないから、取ってこようかな？。

と、思い私は荷台から出て荷物をもって荷台に運びます。それなり

に重かったけど、運べないほどではなかった。

死体に関しては何も感情が湧かなかった。死んだら鹿や羊と同じだなあ。と他人事のように思っていた。

私は少しの間、命の恩人を眺めて荷台の扉を閉めます。そのあと、私は業者席に座りました。幸いにして馬は逃げていなかったなのでこの馬車で帰ることにしました。馬車なんて運転したことなかったけど、私は、速くお家に帰りたい。その一心で馬車を操作しました。

途中、私は振動で荷台の命の恩人の目が覚めないように祈りながら馬車を村の方角へと進めました。

#### 第四話 準備万端？いざ出発、奴隸狩人、初めての殺人、奴隸の少女（後書き）

あゝ無理です。

この程度の心理描写しか書けません。

特に主人公の殺人に関する描写が何と書けばいいのかわかりません！！

感想、罵倒お待ちしております。

..... やっぱり、罵倒はしないでください。筆者の心が碎けます。

第五話 不思議空間再び、神との対話、就寝？（前書き）

ふふふ、もう、わからないよ…わからないんだ…

心理描写なんてどう書けばいいんだよおおおおおおおおお！  
！！！！

## 第五話 不思議空間再び、神との対話、就寝？

（優輝 side）

「…またかよ」

俺はまた、周囲が真っ白な不思議空間にいる。  
ていうか、ここって自称神のいるところだよな…埋めるか。

「埋めんなや！！」

スパ——ン

「っ痛ってえ！」

俺は後ろから何者かにハリセンっぽいもので思いつきり頭部を叩かれた。

っていうかこれ、絶対にあの自称神だろ！！

「煩い！自業自得じゃ！あと自称ではないわ！！」

「あゝ、はいはい、そうでございますねえ」

「貴様あ、敬意というものが感じんぞ！誠心誠意感情をこめて言わんかあ！！」

「カミサマ、ワタシハアナタヲソンケイシマス」

「だ〜から〜、感情をこめて言えと言っているんじゃない〜」

ふう、弄るのも面倒くさくなってきたなあ〜

「おい、貴様の思考はこの空間ではただ漏れたということを忘れと  
りやせんか？」

っは！そ、そうだった！あ〜マジでミスっちゃったぜ…

「…あくまでも反省さんのじゃな。じゃったらここで拷m…ゲフン  
！ゲフン！お話、しようかの。」

「おい！さっきなんて言いそうになった！ていうかあそこまで言っ  
たら俺わかるぞ！拷問だろ！拷問する気だろ！…」

「つくつくつく、なあ〜に、痛いのは最初のうちじゃて、さあこっ  
ちに来て、お話、しようかの。」

お話って…それ絶対肉体言語だろ…！

「い、いやだ！ていうかお話って、恐怖以外の感情が湧かないんで  
すけど…。うお！掴むな！H A N A S E！うあ、いやだあああ  
あ…！」

「くつくつく、神を侮辱したことを後悔するのじゃな。」

「いやあああああああつあああああああああああ…」

俺は悲鳴や奇声を上げながらもこの、悪魔のごとき神に襟元をつかまれ引きずられながらどこかに連れて行かれた…。

ガン！ベキ！バキ！グシャ！メキメキメキ！シャキン！バァン！ド  
ゴオオオオン！ブシャアアアア！……………

くだいぶ時間がたってく

俺は現在…

「誠に申し訳ありませんでした！！」

土下座中だった…。

俺はあの後、俺の人生のトップ1に入るほどの神からの拷問「お話じゃ」…在りがたいお話を聞きました。

「ふう、おぬしが要らんことばかりするからのお、かなり時間を食ってしまったではないか。」

「…ああ、そういえば、なんで俺はまた…ここにいるんだ？」

「うむ、それを言うために来たというのに、着いてみたら不穏なことを考えとるからのう。思わず地獄に落としそうになったぞい。」

「マジですいませんでした!!」

再び土下座。

「うむ！解ったのなら良い！」

「…んじゃ、説明よろしく」

「うむ！まだ理解してなかったようじゃな!!」

「すいません!!!!」

三度土下座。

「はあ、それでは言うぞい。要件は2つある。まず1つ目、これはまあおぬしの精神が崩壊しそうになったのでな、壊れないように精神の

修復と補強じゃ。」

「精神の修復と補強？精神ってステータスで出てきた精神力のこと

か？」

「いや、儂が言っておる精神とステータスの精神力は違うのじゃ、精神力は魔術や魔力のコントロール力のことじゃ、儂が言っておる精神は、おぬしの心とか魂とかのことじゃ。」

「ほゝさいでつか。…ん？んじゃ修復と補強ってのは？…まさかライダー並みの改造をしたんじゃ……」

「いやいや、そんなことをせんでもおぬしの力は全てのライダーを超えておるぞ、まあおぬしが使いこなせたらじゃがな。」

「いや、力だけじゃ超えてんのかよ！」

「まあそんなことは置いといての。」

「いや置くなよこれ結構大事……かな？」

「いや聞かれても…儂大事とは思ってないしの…。」

「…まあ、置いといて、話の続き、どうぞ。」

「…結局置いておくのかのう…まあよい、それでは言っぞい。修復はあれじゃ、先も言ったがおぬしの精神は崩壊寸前まで行ったのじゃ。」

儂としてはちゃんと寿命まで生きてほしいの、そこで一時的に精神だけここに呼んでおぬしが気づく前に修復したのじゃ。」

「はあ、そうだったのか。…うん、ありがとう。」

「どういたしまして…じゃ、んでからのう、また崩壊してしまう危険性も無きにしも非ずといったところじゃからな。崩壊せんように補強しておいたぞい。まあ、補強と言っても生き物を殺して精神崩壊が起きない。といったもんじゃがの、そこから起きる殺してしまった

罪悪感消えないからのう。」

「…ああ、そんぐらいが丁度いいな。殺したつてのに何も感じないんじゃ…いけないよな。」

「…おぬしが気にする必要はないぞい、おぬしが殺した奴らは奴隷狩人れいハンターといっけいかにも職業っぽく言っておるが

所詮はただの盗賊じゃ、いつかだれかに殺されておったじやろう。それが転生したおぬしだった。ということじゃ。

…だが、殺した。ということを忘れてはならぬぞ。殺した時に感じたコトを忘れてはならぬぞ。おぬしが殺したことには変わらないのじゃ。」

「…わく「じゃが」…なんだ？」

「おぬしがあの盗賊どもを殺したおかげで救われた者もおるのじゃ。あの馬車にいた獣人の少女はおぬしがあの盗賊どもを殺したから

救われたのじゃ、あのままおぬしが逃げておったらあの少女は人間

の慰め者になつて塵のように捨てられておつたじやろう。おぬしが逃げず。殺したからこそあの少女は救われたんじゃ。そのことは誇つてよいと思うぞい。」

「…」

「儂から言えるのはこれだけじゃて、あとは自分で考えて自分で決着を着けい。」

「なんか、ありがとな。説教？してくれて。」

「ふおつふおつふお。愚かな人間を導くのは神たる儂の仕事じゃぞい。」

「愚かつて…まあいいや。んで、2つ目の理由は？」

「ありや？認めるのかの？」

「いや、認めたくないけど…それ言ったらまた拷問」お話じゃ…お話になりそうだし…」

「ふおつふおつふお。まあよい、2つ目の理由はのう、言い忘れがあつたからなのじゃ。」

「？言い忘れ？なにをだ？」

「うむ、実はのう、こちらの手違いで死んでしまったおぬしはのう、運命から大きく外れておつての、こちらでも予測がつかんのじゃ。」

こちらとしてもおぬしには寿命まで生きておいてほしいからの、じやからおぬしの運のランクを強化させてもらうからの。」

「へーそうなんだ。ん、了解。」

「うむ、今のところはこれだけじゃて。もしかしたら呼ぶかもしれないが、その時は夢の中とかで会うことになるのう。」

「ああ、わかった。」

「うむ。ではおぬしを戻そうかの。」

「神さま、いろいろありがとうな。」

「ふおおふおおふお。挫けるなよ、精一杯がんばって生きてみるのじゃ。それでは、また会おうかの…優輝よ。」

「っ！…ああ、それじゃまた会おう。」

俺は神さまに別れを言うとうとうと周りの真っ白い不思議空間や神さまが薄くなつて…。そして消えた。おれは心地よい闇の中を漂いながらさっきの会話を思い出した。…少しだけ、少しだけ心が軽くなった気がした。これが修復と補強かね？なんて思いながら俺の意識は曖昧になり…。そして、消えた。

第五話 不思議空間再び、神との対話、就寝？（後書き）

ふう、どうしよう。

この後の展開、まったく考えてない。

ていうかヒロインあの子でいいよね！いいだよ！いいんだ！

はあ…ハーレム無理かも…

作者はいろいろあきらめるかもしれません。

おもにキーワード的な…

その時はここに書きます。

それでは、感想をお待ちしております。

## 第六話 長老との面会、スキル創り、疲労睡眠（前書き）

アクセス数見たらPV1万越え……

……何故だあああああつあああああああ  
あああ！！？

この小説に1万越えする要素があったのか！？？

いやーない！！断じてない！！……多分、おそらく、なかったらいいな？

……まあいいです。ここから戻します。

更新遅れてすみません。

第2話編集しました。

図鑑を2つ追加

スキル削除

ステータスカード登録国変更

ではでは

## 第六話 長老との面会、スキル創り、疲労睡眠

優輝 side

俺は唐突に意識が覚醒した。まあ覚醒って言った時点でわかると思うけどまだ目を覚ましてないんだけどね。ちなみに俺、現在仰向け状態……。

んで、何故まだ目を覚ましてないかというとな、何か知らないけどやさしい波動？っぽいのを頭部に感じるんだよね。

…これ、何だろ？いや害は感じないから敵じゃないだろうけど…うん、どうしょ？このまま目を覚ますか、目を覚まさないか…ふむ、けどこのままじゃどうすることもできないし。…うん、目を覚ましてから決めるか。無計画だけどこれについては仕方がないと割り切ろう。

んじゃこの波動？っぽいのが何なのか確かめてみるか。

そんなことを思いながら目を覚ましてみると、まず最初に視界に入ったのは淡い緑色の光、んで逆光？のせいかシルエットになっている女性っぽい人影。

それから人影が持つている？鈍く光る銀色のなにか……てかこれ剣？………っえ？え？なになんで俺剣突きつけられてんの？？？？？

混乱しながらそんなことを思っているとその人影が……

「やっと起きたか。人間」

「……」

……あゝなんとなく理解したわ。俺、獣人たちの村に連れて行かれ

たのね……。

「言葉はわかるな。立て、そしてついてこい。長老がお待ちだ。」

そういうと獣人の女性は左手から出していた淡い緑の光を止めて右手に握っていた剣を俺の喉に突きつけてきた。

……人間はそうとう嫌われてんのね……。

「あゝ分かった分かった。言う通りにするから剣を下げてください。」

せめて剣だけでも下げてくんないかな？なんて期待を込めながら言ってみたが……

「断る」

獣人の女性はそう一言言って俺の意見をバツサリ一刀両断した。

俺は剣を喉に突きつけられながら仰向け状態からその場に起立した。んでよく見てみると此処、あの奴隷狩人の馬車どれいハンターの荷台じゃん。

……まあ、わかったのはそれだけだな。女性に関しては逆光でいまだにシルエツトだし……。

「着いてこい」

そういうと俺の喉に突きつけていた剣を下げて荷台から降りて行った。

……さて、着いて行こうか着いて行くまいか。……ここで逃げても印象悪くなるだけだしな、それにあの捕まっていた娘も気になるし……じゃあない行くか。

俺は荷台から降りる。って今更気が付いたけどアムルテン消えてるし……まあいつか。

俺はそのまま前方を見るとそこにはだいたい地域の公民館ぐらいの大きさの二階建ての中世風の家？があつた。んでその玄関？の前に紅い髪の女性がいる。

まあ十中八九俺に剣を突きつけた女性だろうな。だって抜き身の剣を握ってんだもん。怖えよ！

んなこと思っているとか紅い髪の女性がこちらに向かって……

「おい！何をしている。速く来い！速く来なければ斬るぞ。」

と怒鳴っています。というよりやばいこのままじゃ斬られる……！

「待って！今すぐ行きますから斬らないで……！」

俺はそう叫ぶと女性のところまで走って行つた。

「ふん、着いてこい」

「……」

……俺は今、自分の目を疑っています。え？なぜかって、だって彼女の頭に……犬耳が付いてるんだから……！ちよっおま、犬耳だぜ！獣耳だぜ！ひゃふうううううう……！！！！

っは！いかんいかん、あまりの感動に少しあつちに飛んでたな。あゝけどよく考えたら獣人の村だから獣耳も当たり前か……っはいかんいかん煩惱退散色即是空

つと割とどうでもいいことを考えながら犬耳の女性の後に着いて屋敷？の中の割とでかい扉の前まで来ていた。

「入れ、長老がお待ちだ。」

……相変わらず淡々と言ってるなあ。こりや相当嫌われてんな。

「わかったよ」

俺はそう返事をする。扉を引いて中に入った。

………はあ？

俺は部屋の中に入って最初に見たのは……

「ごがぁ——すぴい——ごがぁ——すぴい——」

酔っ払いがいた。…っていうか何これ？え？此処長老の部屋だよな！？じゃあなんで！なんで此処に酔いつぶれてる爺がいるんだよおおおおおおおおお！？

こっこれは、部屋の外にいる犬耳の女性に確認を取らなくては！

「っちょ、すいません！此処本当に長老の部屋ですか！？部屋間違えてません！？」

「？何を言つて…っ長老！何を寝ているのですか！！起きてください！！！」

と犬耳さん（名前知らないから以後これで）が酔いつぶれた長老っぽい人を必死に起こそうとしている。

「長老おおおおおおお！！！」

あゝなかなか起きないから犬耳さん、長老の襟首掴んでガクガク

揺らしながら叫んでるなあ。ん〜でもこの長老まったく起きるが気配ない。怒鳴られてんのにいびきをかきながらいまだに眠っている。

「長老！起きてくださいいいいいいい！！」

パンパンパンパンパン

おお〜！往復ビンタだ！

「げほ！ぐは！痛い！痛いわ！！」「パン」ぐは！やめいやめい！」「バキ」あ！ごめん！謝るから！起きるから許して！！」

……まあ、さすがの長老でも往復ビンタを喰らったら目を覚ますはなあ。……うん、傍から見るとなんか長老…哀れ（笑）そんなことを思っていたら長老がやっと起き上がった。

「あゝ痛ててて。あゝ体中が痛いわ。特に顔が……」

と、長老が犬耳さんに向かってジト目でそんなことをほざいている。いやもともとあんたが酔いつぶれてるのがいけないじゃん？

「……すいません」

犬耳さんがシュンと耳を垂らし俯いて謝っている。……なにあれ！可愛い！お持ち帰りしてえ！あと謝んなくていいよ！どうせその爺が酔いつぶれてたのが原因だから！あれ？犬耳さんがさらに俯いちやってる？え？何故に？

「……まあいいわい、それよりも……」

と長老がこちらを向く。犬耳さんもシャキン！という擬音が聞こえてくるような感じでその場で気を付けの姿勢をする。何か顔が赤い気がするけど…気のせいかな。

「待たせたな、僕はこの村の村長兼長老の者だ、そしてこの娘は僕の臨時の護衛だ。おぬしはまだ信用できんなのでな名は教えられん。あと護衛も付けさせてもらうぞ。」

「ええ、別にかまいませんよ。あと面倒なんでちゃちゃっと終わらせてください。」

なんかもう疲れたよ。（精神的な意味で）気絶していたとはいえ神と対話していたわけだしな……

「まあそう急かすな、こっちはいろいろ聞きたいことがあるしな。すぐに終わる。」

「……わかりました。」

……すぐには終わらないだろうなあ。こういうすぐに終わるっていうのは最低30分はかかるんだぜ？

「うむ、ではまず最初におぬしの名を聞こうか」

「そちらが教えないのにこちらが教える義理はありません。」

「……たしかにな、では次だ。」

……てかこの爺無駄にパワフルだな。ただの爺いいじゃねえな。元

戦士つてとこか……っあ！虎耳だ！なる、虎か…

「おぬしの種族は何だ？…まあこれは確認だな。」

「ああ、ご存じのとおり人間だよ。まあそっちの方が人間って言うてたしね？」

目が覚めたらいきなりだもんな。

「ふむ、やはり人間か。ならば知っておろう儂ら獣人は人間に奴隷にされ取ること、書いて人間を嫌悪しておることを。」

「……知ってるぜ。」

さて、どうする……

「だがおぬしは人間共に捕まった儂らの仲間を助けた。何故だ？恩を売るつもりか？それとも横取りするつもりだったのか？」

……声は穏やかだけどこの爺、威圧感出しまくってるよ！怖えよ！殺気！？これ殺気！？……だけど、言う言葉は決まってるのよね…

「……俺は、奴隷が嫌いだ。だがそれは奴隷になってしまった奴が嫌いなのではなく。奴隷を認め利用している奴、奴隷というルールその物が嫌いなんだよ。だから潰した。助けたのはあくまでついでだ。」

これは俺の本音。奴隷というルールそのものに反吐が出る。

「恩を売るつもりも、横取りするつもりもない知らなかったら一生知らないだろうしな。だけど知った。だから奴らを潰した。まあ、殺すつもりはなかったんだが力の制御を間違えて殺してしまった。後悔だつてするし反省もする。だがこれが間違つた行為だとは

思わない。他人に間違いだといわれようともね。人間？ 獣人？ つは！ 俺にはそんなの関係ないね。俺は俺が思った通り行動する。ただそれだけだ。」

「……」

……何も言わない、威圧感もいつの間にか引つ込んでるし。……これもう出てつていいのかな？

「えーっと、もういい」「がはははは！！」……なんですか？」

「面白い！面白いぞ！おぬし！ふふふ、種族なんぞ関係ないか。人間は儂らを者としか見ておらんがおぬしは違うようじゃな。」

……はあ？面白い？俺面白い事なんか言ったか？俺が言ったのってただの我が侂宣言だぜ？つというより俺が嘘を言ったつていう可能性を考えないのかなあ？

「……俺が嘘を言ってるかもしれないよ？」

というところまで黙っていた犬耳さんが少し微笑？を浮かべながら……

「ふふふ、それはないぞ、私にはスキル 読心術 があるからな。何の対策もしていない君の心を読むのなんて雑作もない事なんだよ。

」

……え？ということは、今までの考えてたことって…

「ああ、ちゃんとほとんど聞こえていたぞ（ニヤリ）」

と犬耳さん

「ほう、どういうことを考えておったんじゃ？（ニヤニヤ）」

と虎耳爺

「はい、それh」

「させるかあ！！」

俺は瞬時に 万能図書館 から魔法陣を展開

「【求めるは静寂>>>・闇庭】」

辺りの音を一瞬だけ消し去る。（森を抜ける道中に半分くらいの『チート能力』でできることを 万能図書館 に蔵書？している。）  
犬耳さん及び虎耳爺が驚いている隙に犬耳さんの目の前へ縮地で移動（縮地は修行中に俺自身が会得済み）口をふさぐ。それと同時に音が戻る。

「頼むから言わんでくれ！」

俺は右手で口をふさぎ、左手で拝むように頼む。

「もが！？もがもが」

犬耳さんは最初に驚いていたが俺の言葉を聞き首を縦に振った。ふう何とか間に合ったぜ！…まあいざとなったら時間も止めれるんだけだな。

「ふう、まったく冗談が通じんな。」

「冗談だったとしてもあれは焦るわ！！てかニヤニヤしながら言われたら冗談に聞こえんわ！！」

てかマジ本当に焦った。いやたいして恥ずかしいことは考えてないとは思うんだが考えていたことを他人に知られんのは思った以上に恥ずかしい。あれだクラスみんなの前でなんか発表する感じた。…ってこれも聞かれてんのか！？

「ああ、ちゃんと聞かせてもらっているぞ。」

「かつ勘弁してください！！」

俺は土下座をしながら懇願する。真面目につらいぞ読心術。

「あゝ、いやほらやめるから、立ってくれ、な？」

と犬耳さん。俺が土下座までするとは予想外だったらしい。……うん、混乱してるのがなんか可愛い。なんか言動から生徒会長です！っていうオーラ？がしてるから戸惑っているのがこっ……ぐつと来るのよね。うんこれがギャップ萌えというやつか？

まあ、そんなこと考えながら立つ。犬耳さんは本当に読心術をやめ

てくれたようだ。聞かれてなくてよかったよかった。

「まあ 読心術 で君の言葉が嘘でないことが分かったしな。ついではいえ仲間を助けてくれたんだ。私としては恩を感じているから恩返しをしたいんだよ。」

「いや恩返しはしないでいいですよ。そもそもついだと言ったでしょう?」

まあ、ついだって言うているけど助けちゃったあの娘がどうしてるかぐらいは気になるしなあ。

「おぬしにとつてはついだだろうけれども、儂らにとつては仲間を救ってくれた恩人なんだよ。恩人はもてなすべし。村の掟の一つだから恩返しぐらいさせてくれや。」

んー、こうまで言われると聞かない訳じゃないけどなあ。……まあ害はないか、な?

「はあ、そこまで言うならいいですよ。でももてなさなくていいですよ。その代りしばらく此处に滞在させてください。」

「?、滞在だけでよいのか?村を上げてのお祭り騒ぎにするつもりだったのだが……」

それも面白そうだけどなあ

「いや、長老たちは認めてくださいましたけど。他の人たちはどうなのかわかりませんしね。」

「そうか、まあ君がそういうのならそうするが。」

「ありがとうございます。」

「うむ。では、儂の家に泊まれ、幸い部屋なら腐るほど余っているからな。」

「はい、そうさせてもらいます。」

「ああ、あと敬語で話さんでもいいぞ。堅苦しいのは嫌いなもんだな。」

「あ、そうっすか。んじゃ遠慮なく。」

まあ、途中とところどころ敬語じゃなかったけどな。

「ああ、そうじゃ、儂の名前を言っておこう儂の名はティガルフ・アルティモーだ。」

「私はサクラ・シャルグランドだ。サクラと呼んでくれ。」

「俺の名前はジェイク・G・フリードだ。しばらくの間よろしく頼む。」

と堂々と偽名を名乗った。…まあこつちの世界での名前だから偽名ともいえないんだけど、あくまで俺の名前は國城優輝だからな。偽名と変わらんだろ…

と考えていたら犬耳さん改めサクラさんが……

「では長老、私は村の皆に説明してきます。」

と言って部屋から出て行った。

「……説明？何の説明に行っただんですか？」

と虎耳爺改めティガルフさんに聞く……

「ああ、おぬしの処分についてのことをな。」

あゝなるへそ、さっきの話し合いのことを他の人に説明に行っただか。

「ではおぬしの泊まる部屋まで案内するから着いてこい。」

と言いティガルフさんが部屋から出ていく。ティガルフさんと世話をしながらまず玄関のところまで戻る。このティガルフさんの家は玄関から入るとまず三方向に通路があつて

入つてすぐ真つ直ぐ行つて突き当りの部屋が村長兼長老の執務つていうか仕事場？で右に行くと控室つていうか待合所？みたいなのがあり左に行くと階段があつて上がると端まで通路で

右側が窓で左側が今は使われてない空き部屋が5つと物置が1つある。他にも部屋があるらしいがさすがにそこは見せられないらしい。

ああ、ちなみにこの村の名前はアルラ村らしい。

俺は奥から二番目の部屋を使わさせてもらつことになった。

「んじゃ、夕飯のときに呼びに来るからな。」

「ああ、頼むわ。」

俺はティガルフさんと別れて部屋に入る。

……結構きれいにしてんな。

「定期的に掃除でもしてんのかなあ？」

……まあいつか。

「うん、んじゃとりあえず。」

俺は『知識』をもとに自分で創って 万能図書館 に蔵書してある  
自己流の結界魔法陣を俺を中心に足元に展開する。

「【我、此処に領域を定めん、我、定めしこの領域に結界を張らん、  
音を遮断し虚像を映せ>>>・全能<sup>イージス</sup>の結界】」

魔法陣が淡く輝きこの部屋の床の形に魔法陣が拡大・変形する。すると部屋全体が淡く輝きそして消える。部屋は【全能<sup>イージス</sup>の結界】を展開した後だと  
部屋全体が少し白く見える。これは結界の影響で結界内の人には少し白く見るのだ。

「これで結界内の音は遮断され外の音は入ってくるし、外から見ると俺はベットで寝ているように見えるはずだ。」

ちなみに、今回使ったのは魔法の方、別に概念魔法の方でもよかったんだけど詠唱しなかったのと、速く魔法に慣れた方がいいかな？と思って魔法にしといた。

『知識』によると概念魔法は使いづらく超高等技術らしい。  
ということだ、使い手は王宮魔術師ぐらいじゃね？って思ったのよ。『知識』でも専門知識とかは

あるけど何人いる？とか国同士の状況とかそういうのはないのよね。

まあそれは仕方がないとして……

「スキル、創るか。」

森で創ろうかと思ったけども、思いつくのは全てすでにあるスキルだったしな。今は『知識』と照らし合わせても該当しないスキルがあるしな。さっそく創るか！

ちなみに、スキルは人が考えて神に申請するとスキルとなるらしい。所得条件は神が決めるそうだ。

……そっぴや、話し合い15分ぐらいで終わったな。マジで直ぐだったとは……………

〈1時間〉

「終わったあ〜」

あ〜疲れるわあ〜まさか創る度に全身に痛みが走るとか、何の拷問？って思ったもん。まあ懲りずに創りまくったんだけどね（笑）創ったスキルは……

金剛力士   LV：1

身体強度を自由に上げることができる。この時、上げた分だけ身体重量が増す。

上げる分だけ基本攻撃力と防御力が上がる。が、基本瞬発力が上げた分以上に下がる。

レベルが上がると基本瞬発力の減少が少なくなる。最終的には減少が0になる。

聴覚保護   LV：1

ある一定以上の音量を一定ラインに抑える。工事現場の音を普通の話し声程度にする。

レベルが上がると一定ラインが下がる。最終的にはジャ。アンの歌声の2倍の音を話し声程度にする。

#### 盗み防止 LV:1

身に着けている持ち物が盗まれなくなる。身に着けていない物の盗まれる確率をほんの少し低くする。

レベルが上がると身に着けていない物の盗まれる確率を下げる。最終的には自分の物と認識している物全てが盗まれなくなる。

#### 索敵範囲強化 LV:1

ユニークスキル 万能図書館 の『地図帳』に更新する周辺情報の距離を広くする。

現在半径500m

レベルが上がると距離を広くし特殊効果を与える。最終的には3000mになる。

#### 自動装填 LV:1

銃器類の装填を自動で行う。装填のタイミングは全弾撃ち終わった後。弾丸の場合5秒で最大20発、ミサイル等の場合5秒で最大2発自動生産&装填する。

あらかじめ予備を生産、所持していた場合タイムラグなしで終わる。

レベルが上がると自動精算の時間が短くなり創られる弾丸・ミサイル等の量が増える。最終的には全ての装填時間が0、自動生産数が

最大数になる。

料理   LV：3

料理の技術が上がる。料理で失敗する確率を下げる。

レベルが上がる度にガイアの料理等のレシピを『万能図書館』の『食物図鑑』に保存する。最終的にはガイアのレシピを全て習得及び常時更新する。

釣り   LV：1

釣りの技術が上がる。食い逃げされる確率を下げる。

レベルが上がる度に使用する釣竿の強度等を強化する。最終的にはクジラ並の大きさも釣れるようになる。

……………の7つを創ってみました。また言うけどものすごく疲れるよこれ。スキルのいくつかは某狩猟ゲームのをパクったりします。あと、料理。これ

日本の料理を食べたくて創っちゃいました（笑）このスキル、実は似たようになっていかガイアのとが無ければほぼ同じスキルがあるんですよその名も 料理人

ね？ほぼ同じ名前。だけど創ってみました。……まあ日本料理が作れんならいつか。あと料理だけレベルが3かという趣味で料理作っててそのせいっばいですたい。

あゝあとレベルはMaxが6で上げ方がとにかく使うしかないそうっす。はい。あと錬金術がこの世界にはなくてそれっばい土系統の魔法ならあるんだけど規模がしょぼいから

スキルで創ろつかないか？とか思ってたが俺パンつとやるやつできましたわ。鋼ですよ？わかりますよね？というより痛みで疲れま

すた。しばらく寝ます。夕ご飯まで  
あと少しあるし、ではお休みなさい。  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z

第六話 長老との面会、スキル創り、疲労睡眠（後書き）

しかし1万越えねえ〜するとは思ってなかったからなあ〜

だっていまだに感想ないし（笑）

感想、お待ちしております。

ある程度なら罵倒も結構です。

でもやりすぎると筆者の 硝子の心と体 が発動して粉々に砕け散りますのでそこそこをお願いします。

しかし、信じられんなあ〜

第七話 謝罪んで夕飯！就寝！（前書き）

うん！此処まえがき書くの面倒になってきた！

## 第七話 謝罪んで夕飯！就寝！

優輝 side

30分後、だいたい夜の7時ぐらいですね。by白銀

「zzzzzzzzzz」

「……………（ジ———）」

「zzzzzzzzん」

「！（ビクッ）」

「うんzzzz」

「……（っほ）」

「うおおおおおおお！！！」

「！！（ビクッぽて、サッ、ぱたぱたぱた）」

ガチャ、パタン。

「はあはあはあ、ゆ、（ごくん）夢かああ」

あゝ夢でよかった。よかった。うん！だって見たのがあれだぜ、台所の敵にして地球最強の生命力を持つ者、黒光りするGが普通乗用車並みの大きさになって飛びながらこっち来るんだぜ！

うっっ思い出しただけで鳥肌&寒気が……

「あゝすげえ寝汗だなあ……」

うっんこれは洗濯か？てか、此処ってどうやって洗うんだろ？『知識』でもこういう知識はないからなあ。ちなみに、ハンターUは脱いで戻しました。俺の今の格好は上下ともに黒いジャージです。『物質具現化』で出しました。脚と腕の外側のところに白いラインで左胸に歯車のマーク……はい、このマーク自作です。自分の印ですよ。高2になっていまだに自分だけのマークをもっているのが、何か？

……まあいいか。ちなみにこのジャージ。出したら速攻で 万能図書館 に蔵書されてたね。前は結構時間がかかってたんだが今は視界に入って5秒もしないうちに終わっちゃうよ。慣れかねえ？

……そういや起きた時扉が開いたような？……まあ気のせいですね。わかります。

けど本当にこれ下着とジャージが肌に引っ付いて気持ち悪い。洗濯とかも獣人は魔法とか使えないから手作業だろうし夜だから無理だ。新しく出してこれを捨ててもいいけどそれはなんか勿体ないような気がするし。

うっんどしよう……あ、そうだ新しく創った魔法の実験台にしよう！

俺は魔法を使うため魔法陣を足元に展開（ほぼ無意識に展開できるようになったぜ）し……

「えっつと【全てを清める>>>・紅き浄炎】」

アカキジョウエン

キワード

呪文を唱える。すると俺の胸の高さ10？ぐらい前方に蠟燭みたいな紅い炎が出たと思うと一気にこちらに向かいながら巨大化し俺（180?）を呑み込みそして縮小しながら通り過ぎて俺から10？

ぐらい進み元の蠟燭並の炎になり消えた。

俺は服を触ってみるとアイロンを掛けたみたいに乾いている。それどころか体中の汗とか汚れが無くなって。おお、成功だああ！こいつで俺はアイロン要らずだぜ！てか魔法超便利じゃね！？うゝむあとは何ができるかなあゝ？考えるだけでオラワクワクすっぞ！

……… すぎません。調子乗りました。いやゝ自己流魔法が成功すると思いのほかうれしかったんでね、ネタに走りました。つとそんなこと考えてたら……

「（ドンドンドン）おゝいジェイクゝ。飯だぞゝ。」

と言うティガルフさん。てか扉が壊れそうだから速く行かんとな！

「あゝはいはいゝ了解す。」

あゝ前回言うの忘れてたけどティガルフさんは。剣の。鍛冶に出てくるハ。ニバルさんの十字傷を無くし髪の毛をぼさぼさにして微妙に虎耳が見える程度で髪と眼の色を水色にした感じ。サクラさんはシー。ユーブの。野錐。のような感じ、

髪型も一緒だし。髪の色と眼の色が紅色で犬耳を付けた感じだ。……… そういえば、聞くのを忘れてたけど捕まってた娘はどうなったんだろ？ティガルフさんとサクラさんは何も言ってこないから多分大事はないと思うけど……… うん、食べてるときに聞こうか………

俺はそんなことを思いながら扉を開けて外に出たらティガルフさんがいて………

「起きたか。んじゃ着いてこい家の母ちゃんが作った飯をごちそうしてやるぞ！」

「おお！そいつは楽しみだなあ！……… ていうかティガレフさん結婚

してたんですか。」

うん、ちょっと驚いた。結婚してたんだ。  
俺はティガレフさんに着いていく。

「おい！そいつはどういう意味だ！俺だって結婚ぐらいしとるわい。」

「いや、なんか生涯独身！っていう感じがにじみ出てたんで。」

「……おぬしから見たら俺にはそんなのが出とるんか。」

あつ、ちよつと落ち込んでら……

「はあ、まあいいか。それより……着いたそこが我が家の食卓だ。」

そういつてティガレフさんが目の前の扉を押して開く。扉は片開きのくせに俺とティガレフさんが並べるくらいの幅がある。

部屋の広さはだいたい一般家庭のリビング程度の大きさで結構広く、部屋の真ん中をかなりでかい長机が占領している。机は部屋の半分程度の大きさで俺から机を挟んで向こう側に食堂のようなカウンターがあり

カウンターの向こう側が厨房みたいだ。んでカウンターの左側に食卓と厨房？を行き来する通路がある。

……でけえ、てかこれ食堂じゃね？

なんてことを考えていたら厨房の方から恰幅のいいザ・食堂のおばちゃんin熊耳みたいなおばちゃんが出てきた。

「おやおやおや、初めましてえ。私はそのボンクラの妻のベアリ

ウス・アルティモーっていうもんだよ。あんたがアリアちゃんを助けたっていう人間かい？それならお礼を言わなきゃねえ、ほんとありがとうねえ。

旦那から聞いたけどあんたはあの子を助けたのはついであって言うけど、あの子を救ってくれたのには違いなんだからね。あんたが救ってくれなきゃあの子は今頃奴隷さね。あの子の恩人は私たちの恩人、おもてなしをせんことには

私らが後悔するからせめて今夜の夕食に関しては盛大にやらしてもらうからね。」

というと食堂のおばちゃん改めベアリウスさんは食堂の方に駆けて行った。俺は呆然としていると苦笑いしているティガレフさんに背中を押されながら席に座った。

…… oh、マシンガントーク。反論する余地ナッシング…… まあいつか。今夜の夕食限定って話だし。それに此処の郷土料理なんかも興味あるしな。この料理のことにしても『知識』にはないんだよね。いや、料理自体の知識はあるんだけど

その作り方、レシピがないのがほとんどなんだよなあ。そーいや、鍛冶とかもそういうのがあるっていう知識はあるけど作り方なんかはないなあ……？そーいやさっきのマシンガントークでアリアちゃんって捕まっていた娘の名前かな？

ふむ、ちよつと聞いてみるか、俺は隣でワイン？を飲んでいるティガレフさんに聞いてみる……

「そーいやティガレフさん、捕まってた娘ってどうしてるんですか？」

「ん？ああ、アリアのことか。アリアなら大丈夫だったぞ、多少の

精神的疲労があつたけど寝たら治る程度だしな。」

ふむ、大した怪我がなくてよかったけど、トラウマになってないかねえ？

「だけど元からあつた対人恐怖症に拍車がかっちまったけどな。」

「はあ？対人恐怖症？」

「まあ極度の人見知りつてやつだよ。村の連中なら大丈夫なんだが他の奴に会うとすぐに逃げちまうんだよ。いつもは天真爛漫なんだけどなあ。」

ふむ、そこは俺の知っているのと同じなんだな。

「あ！そうだ言うのを忘れていたけどアリアとアリアの両親のアスライアとアグリウスそれと伯父のアスライウス、んでサクラが来るから。」

……………

「はあ！！え！？いつ！？いつ来ると！？え？てかなんで？サクラさんはわかるけど何故にアリアとその両親それから伯父が来るの！？」

つていうかサクラさんが来たらまた思考だだ漏れ状態に……いかに！早急に対策を練らなければ！

俺は『知識』から読心術の対抗策を検索する。

ティガレフさんは少し引いたように答える。てか引くぐらいなら早く言ってほしかった。

「あ、ああ。両親に関してはなんかお礼が言いたいんだとよ。んで伯父の方はなんか話したいことがあるんだと。サクラはアリアの付添だな。」

俺はそれを聞きながら『知識』から読心術対策の魔法を探すが見つからない。仕方がないから自己流の魔法を使うことにする。足元に魔法陣を展開。んで即起動する。

「【我、我が心に防壁を築かん、その壁、如何なる技を持つてしても超えることできぬ古城の城壁なり、立塞がれ>>>・精神城壁】」

俺の足元に展開していた魔法陣が一瞬輝きそして消滅する。この【メンタルラール精神城壁】魔力を流していたら半永続的に存在する魔法だ。【マイン精神城壁】は精神や心に関するあらゆる現象を無効化する魔法だ。

無効化する魔法は【メンタルラール精神城壁】に流す魔力の多さに比例する。んで俺の魔力は測定不能状態で、魔力回復量が高く消費するとすぐに全回復してしまう。よって、もう俺は読心術とかそういう感じので心をや思考を

読まれることが無くなったのだよ。

と考えていると……

「おい！いきなり魔法を使うなびっくりしただろうが！」

とティガルフさん

「あゝすいません。さっきの魔法はサクラさん対策の魔法だね。読心術防止の魔法なんすよ。」

「……はあゝなるほどな。まあおぬしじゃ儂らのような対策はでき

んじゃろっしな。」

「? あんたら用の対策があったりすんのか?」

「ああ、と言ってもこれは本能じゃからな。口頭でうまく説明できんわい。」

「はあゝそういうもんですか。」

ふゝむ、そういうのがあるんですねゝ

「んで、サクラさんたちはいつ来ると?」

「ん? もう、すぐなはずだ。」

といいワイン? を瓶でラッパ飲み……てか食事前からそんなに飲んで大丈夫なのかねゝ?

そんなこと思いながら座って暇をもてあそんでいたら玄関の方から

……

ドンドンドン。ドンドンドン。

「んお! 来たようじゃな!」

といいティガルフさんは玄関へ。

そしたら今度はベアリウスさんが……

「はいはいはい、できたよから、運ぶの手伝ってゝ」

と言いこちらを見ずに料理をカウンターへ置いていく……

「これは空気を読んで俺が持っていくパターンで！」

と言ひ席を立ちカウンターへ行き料理を取って机に運ぶ。……服装もちゃんとしとくか。

んなことを思い俺は前掛けエプロンとバンダナを『物質具現化』で出し前掛けエプロンを着用しバンダナを三角にし頭に付ける。どっちも色は白です。やっぱこういうのは清潔感だよね。

なんて考えながらハ。ヒの止まれを鼻歌で歌いながら料理を運んでいると扉が開きティガルフさん達が入ってきた。……知らない人もいるから多分アリアちゃんとその両親んで伯父だろうな。

「わぁおいしそう！」

と歓声を上げたのがおそらくアリアちゃんの母親のアスライアさん。見た目超若い。十代後半〜二十代前半ってところで、身長170ちょっとか。水色というよりは白に少しだけ水色を入れた感じの髪と眼の色。んで猫耳つと……

騒いだら負け歓喜狂乱したら負けつと。あと胸がすごい……以上！これ以上は負ける！

「ははは、すごい量だな。食べ切れるかなあ？」

と苦笑している若そうな人。多分アリアちゃんの父親のアグリウスさんだろう。うん、この人も見た目超若いね二十代中期ってところか。身長は175付近かな？髪と眼は水色っていうよりは青色に近いね。んで猫耳つと。うん、ここは大丈夫。

「……………おいしそう」

とぼつりとつぶやくのはアリアちゃんかな。口数が少ないのは俺がいるせいかな？……ふむ、あの親あつてこの子ありつて感じて美少女だねえ。あれだぜ口魔の夕。サみたいだ。見た目は小6あたりか、身長はだいたい150？かな？髪と眼の色を水色。んで猫耳つと……声を上げたら負けだ。料理を運ぶのに集中するんだ！

「……相変わらずだなあ。ベアさんの料理は。」

と懐かしい感じに言ったのはアグリウスさんより少し年上の眼鏡をかけた人たぶんアスライウスさんだな。およそ三十代つてところか、身長は178ぐらいかなアグリウスさんより少し高い感じだし。髪と眼は濃い水色といった感じだ。そして猫耳。うん、男だと大丈夫だ。

「ふふふ、ベアさんの料理はどれも美味しいからなあ」

と耳をピクピクさせているのはサクラさん。尻尾があつたら千切れんばかりに振ってるんだろうなあ。……ヤヴァイ想像したら予想以上に可愛い。いかん気をしっかり持つんだ俺！此処で魔力コントロールをミスって【精神城壁<sup>メンタルライル</sup>】

が解除されて読心術で聞けれでもしたら斬り殺されるかもしれんぞ！負けるな俺ええええええええええ！！

俺は何とか冷静になりながら料理を運ぶ。他のひとはみんな席に座っている。座っていないのはティガルフさんとベアリウスさんと俺だ。

「おお！うまそうだな！……ジエイク、何やってんだ？」

と聞きながらさっさと椅子に座る。——ちなみに料理はパンが山盛りの皿が2つ野菜が山盛りのボウルが1つんで肉料理が乗った皿

が20つぐらい。……肉が多い。――

俺は、つぶ、ボケてんのか？という目で見ながら

「見てわからんか？料理を運んでんだよ。」

と言いつつ俺はカウンターにある残りの料理を運ぼうとした。  
そしたら厨房からベアリスさんが……

「はいはいはい、お待たせねえ」

と言いつつ出てきた。

んで、残りの料理を運んでいる俺を見て……

「ありや、こりや悪いことしたねえ、せつかくもてなされる側なの料理を運ばせたりしちゃって。」

とバツがわるつそうに言う。

「うーんだけど俺はこういうのは、もてなすもてなされる関係なく手伝うもんじゃね？思っただよね。だから謝んなくていいよ。うん。」

「ありや、そうかい？それじゃあ今更だけどお願いするわねえ。」

「へいへい、お願いされますた。」

「はあ、まったく。家のボンクラに見直させたいぐらいだねえ。」

と言いつつベアリスさんも席に座る。

俺はバンダナを外し腕に巻いて席座る。座ったらなんか全員がこっ

ちを見ている。いやアルティモー夫妻以外がこつちを凝視？している。

「えっと、なにか？」

「ええ、娘を助けてくれてありがとうね。」

と頭を下げるアスライアさん。……感謝されることでもない気がするのだが……。

「君が助けてくれなきゃもう会えなくなるところだったんだよ。本当にありがとう。」

と同じく頭を下げるアグリウスさん。

「えーっと、あの、頭を上げてくださいよ。俺、お礼をされるつもりなんかなかったわけだしね。それより食べましょうよ！俺腹減ってますよ！」

お礼されるつもりが無かったのにされると、こう……むず痒いっていうか他人からお礼なんてされたことなかったしな。

「そうさね。早く食べないとせつかくの料理が冷めちまうよ。」

「そうだぞアスライアもアグリウスも、ジェイクが言いって言うてんだいいじゃねえか。というより早く食わねえと俺が食っちまうぞ。」

と取り皿に料理を取っていくアルティモー夫妻。

……てかもう食ってんし！いかん、俺も取らなくては無くなる！！



「……………（じ——）」

じ——つとこつちを見ているアリアちゃん。食べてるときは見えないけど噛んでる時とかにはこつちをじ——つと見ている。なんか体に穴あきそう。

……気のせいかこの目線を感じたことがあるような？…気のせいか。

「????」

サクラさんはこつちを見ては首を捻り不思議そうにしている。……多分読心術で心が読めないのが不思議なんだろうね。

「……………（じ——）君は、人間なのかい？」

と聞いたのはアスライウスさん。……ああ！そのことを聞きたがってたのかね？

「はい、そうですよ。それが何か？」

「……………（じ——）そうかい。ちょっといろいろ聞きたいんだけど食べながらでいいかな？」

「？いや、はぐ、別にいいれふけど。もぐもぐ、ごくん、こつちも質問OKっすか？」

「ん？お〜け〜???まあ何のことは後で聞くとして、うん、いいよ。」

「ほいほい、はぐ、んじゃなんれしょうかもぐもぐ?」

……と雑談しながら食事をしていきあつという間に食事は終わりました。

べ、別に手抜きじゃないんだからね！……すいません。まあアスライウスさんからは俺のことに關している聞かれますた。なんか男なのに料理を運んだのが不思議なんだそうです。んで俺は獣人のことや郷土料理の作り方なんかを聞きますたよ。なんか不思議そうな感じで見られてね。

あと、アリアちゃんは終始こっちを観察するようにじ——と見てやした。……怖がつてんのかな。子供好きとしては悲しい限りです。……ぐすん。

サクラさんは何故読めないのかずっと考えていたそうで食事終了して帰る間際に聞いてきましたよ。まあ、正直に言っただけですね。そしたら結構驚いてました。何故驚いたのか聞いてみるとスキルを防ぐ魔法はあまりないそうっすね。

こりや他の魔法に詳しい奴には教えない方がいいなあ。うん。

まあそんなこんなあり。やっと就寝っす。今度は悪夢を見ないようになりたいねえ。あとなんとかアリアちゃんとは仲良くしたいなあまあそんなわけでお休みいゝゝzzzzzz

第七話 謝罪んで夕飯！就寝！（後書き）

文がおかしいところ、間違っていると、感想、ほどほどの罵倒お待ちしています。

## 第八話 お礼、出発のお話、修行 part 2（前書き）

ヒロインの性格を無口キャラに路線変更するぜ！

まああといろいろありますがそこは気にしない方向で…

あと今回短いです。前回はハイテンションだったからなあ……

## 第八話 お礼、出発のお話、修行 part 2

〽翌日の5時ぐらい。丁度日の出だね！by白銀〽

〽客室B〽

「Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z」

「……………（じ——）」

……

「Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z」

「……………（じ——）」

……

「Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z」

「……………（じ——）」

… なんか見られてる？

ども、おはようございますです。優輝つす。突然なんすが意識が覚  
醒したらなんか見られてる視線を感じんつすよね。んで、薄目開け  
てちら見してみたらさ、アリアちゃんが枕元に立ってじ——つと  
こつち見てんすよ。……何なんでしょう？俺、嫌われてんじやなか  
ったのかなあ？ん？？？わからん、さっぱりわからん。……考え

たつて仕方がない。起きて聞いてみるか。

「ん、おはよー!!(ビク、ぼて、……じわ)」……」

俺が挨拶をしようと声をかけると一瞬アリアちゃんの体が硬直し逃げようと方向転換しようとし躓きこちらを見たまま尻もちをつく。すると今にも泣きそうな感じに眼がうるうるに……

……怯えてる?っは、いかん!このまま帰したら俺が泣かしたと思われる!そしたら、村人に殺される!!

「えっと、あの、落ち着いて、ね?ただのあいさつだから、そんなに怯えないで?」

「っひぐ……っぐ……(うるうる)」

あゝ——!!ど、どうしたらいいんだあ——!

!っは、食べ物!子供には食べ物だ!……ってソイ。ヨイ(マンガーコナッツ)しかねえ!いやそれでもいけるか?

「うっうっひぐ……(うるうるうるうる)」

うお!ダムが決壊寸前!えい!どうにでもなれ!

「ほら、これおいしいよ、あげるから、だから泣かないでえ!」

「っひぐ?うっう……ぐす、……(こくん)」

な、泣き止んだあ。……っていうか食べ物で泣き止まずってなんかなあゝ……ってかこれ傍から見りや変な奴じゃね?うあゝ選択ミスったかあゝ?

「?……ぱく、もぐもぐ、こくん……ぱくぱく(ぱあ)」

……なんかすごい勢いで食ってんな。そんなにおいしかったのかソイ。ヨイ。まあソイ。ヨイって分類では菓子だったしな。なんて考えながら俺はベットから起きて体をほぐし軽く自己診断をする。

……うん、体調は万全だな。そういや此処の便所の場所聞いてなかったな。どこかな?

「……(ちょいちょい)」

とアリアちゃんが俺のジャージの裾を引っ張る。

「ん? なにかな?」

といい俺は中腰になりアリアちゃんを目線に合わせる。

「……………ありがとう」

と言うアリアちゃん。ほう、ソイ。ヨイがおいしかったのかな? 俺もソイ。ヨイは好きだからなあ。前は土日3食ソイ。ヨイだった時があったしなあ

く土日3食ソイ。ヨイは作者の実体験です。あとソイ。ヨイっておいしいよね?。by白銀

「お礼はいいよ、まだあるしね。もう1ついる?」

と聞き。ポケットに手をつ込み 万能図書館 からソイ。ヨイ（カカロレンジ）を出しポケットから出したように見せる。するとアリアちゃんは首を横に振り……

「……………助けてくれた。」

とポツリ……………ああ！あのお礼ね！ああ、納得納得それで俺の部屋に来てんのね。

「ははは、どういたしまして。……………ん？そついやなんでこんな朝っぱらからアリアちゃんは俺の部屋に？」

ちよつと疑問に思ったので聞いてみることに、アリアちゃん曰く、実は昨日の夕食の時からお礼をしようとタイミングを窺っていたが結局言えなかったそうだ。んで仕方なしに朝早くに俺のところに来たらしい。

「ということは、俺アリアちゃんに嫌われてたわけじゃないんだ？」

「……………嫌いになんかならない。」

つと断言するアリアちゃん。最後の方は聞こえなかったけど……………これは純粹に子供好きとしてうれしい限りですはい。（じゅん）あつけど俺は断じてロリコンじゃないんでそこんとこ宜しく！と割かしどうでもいいことを考えながら出発準備をする。って言うてもバックパックの中身の点検ぐらいなんだけどね。すると……………

「……………（ちょいちょい）」

とジャージの裾を引っ張ってくる。

「……………さっきの。」

と言うアリアちゃん。おっソイ。ヨイですね。わかります。  
なんて思いながらさっき出したソイ。ヨイ（カカオオレンジ）をア  
リアちゃんに渡す。

「（ぱあゝ）ぱくぱくぱく」

なんかリスみたいだなあゝ。…………猫耳だけど。

うし、んじゃまアルティモ―夫妻に挨拶しに行こうかな？

「んじゃ俺下に行つてティガルフさんたちに挨拶に行くけど一緒に  
行く？」

「……………（こく）」

「よし、んじゃ行くか。」

俺はそういうと廊下に出る。するとアリアちゃんが俺の右隣に来て  
手を握ってきた。

「ん？…………ああなるほど、それじゃ行こうか。」

と言いアリアちゃんの手を握りながら下に行く。多分ダイニングに  
居んじゃねえかな？

「……………／／／／うん」

「ダイニングルーム」

「お、いたいた。おはようティガルフさんベアリウスさん」

「……おはよう」

「おう。おはようさん……ってアリア！なんで家に！？」

「アリアちゃん！？なんで此処にいるさね？」

おお驚いてら。俺はさっきの話をティガルフさんとベアリウスさんに話す。その際にアリアちゃんが物欲しそうにこつちを見たのでソイ。ヨイ（アップル）をあげたら、にぱあ、と背後にひまわりでも咲きそうな感じの笑顔

を浮かべてくれた。……めっさ可愛い！すげえ可愛いよ！あれだなサクラさんの時とは違う可愛さだぜ！

「ほあ、なるほどねえ」

と神妙な顔で頷くティガルフさん。

「アリアちゃんすごいじゃない！村の人以外の人と話すなんて初めてじゃない？」

あ、そういや対人恐怖症って言ってたな。

「そっぴやそっぴやだったな。アリアちゃん頑張ったんだなあ」

と言いながらアリアちゃんの頭をなでる。アリアちゃんは気持ちよ

さそうに耳を垂れて目を細める。……超可愛い！！ああ、抱きしめてえ！だが抱いた瞬間俺はロリコンの烙印が……たっ耐えなくては……

「……ん、頑張った。」

とアリアちゃんがちよつと嬉しそうに言った。その後俺達も席に着きティガルフさんたちと朝食を食べながら雑談を始める。その際なのでのをやめたら、とても名残惜しそうに俺の右手を見ていた。……またなでてあげようかな。

「ああそうだティガルフさん。」

「ん？なんだ？」

「ここら辺でそこそ治安のいいところ知らない？」

「ん？ああ、ここらへんだったらグロンの街だな。」

「なるほど、グロンねえ。」

「それがどうかしたのか？」

実は俺の『知識』や『地図帳』の情報では○○の街、××地方のどこそこ、現在地から m。っていう感じの情報しかないんだよね。だから治安とか特産物とかは人から聞かないとわからなかったりするんだよ。

まあ、俺がそのことを知ったら『知識』と『地図帳』にそのことが更新されるんだけどね。

んで、何故俺がそのことを聞いたかと言うと……

「いや、そろそろ旅を再開しようかと思ってね。」

「！……（ピク、チラ）」

「そうか、いつ行くんだ？」

とティガルフさん。……アリアちゃんの視線が痛い。なんでだろ？  
こつちを凝視してるし……

「早くて明日の早朝には出発するつもりだ。」

此処からグロンまでの距離は歩きで丸1日ぐらいかかる。俺は馬車に揺られながらのんびんだらりで行きたいからなあ、その準備で1日潰すつもりなので早くて明日には出発しようと考えてある。

「……アリアちゃん。ちょっとこつちに来てくれないかい？」

とベアリウスさんがアリアちゃんと一緒に厨房の方に行った。？なんだろうな。ご飯の仕込みかな？  
とか考えていたら……

「そうか。早くて明日か。」

「？まあ準備が終わり次第だけだな。多分明日だろう。」

「……そうか」

……なんだろう？嫌な予感がする気がする。……まあ気のせいかな。

「それじゃあ、俺は準備をするんでこれで。」

「ん、俺は仕事があるから何かあつたら村長室まで来てくれ。」

「ほいほい、んじゃベアリウスさんとアリアちゃんに宜しく。そいじゃ。」

と言い俺は部屋に向かって歩き出す。

〈客室B〉

「さてと」

俺は部屋に戻ると部屋のだいたいの真ん中に立ち……

「【我、此処に領域を定めん、我、定めしこの領域に結界を張らん、音を遮断し虚像を映せ>>>・全能の結界】」

【<sup>イージス</sup>全能の結界】を発動する。俺の足元にあつた魔法陣が部屋を覆い結界を張る。その後、俺はダイオラマ球を 万能図書館 から出す。手のひらに出てきたダイオラマ球のステータス画面が眼球に映し出される。

俺は前の修行の時と同じ設定をしダイオラマ球の中に入った。

……ちなみに、前回の修行は魔力制御と『チート能力』の把握と身体能力に關しての修行だったが、今回は自己流魔法の試し打ちと『チート能力』の制御、んで武器を使った身体強化の修行がメインです。んじゃ頑張ってくださいませ！



第八話 お礼、出発のお話、修行 part 2（後書き）

ん、そういうわけっす。

あと獣人は耳がありゃあれもあります。まだ見せてませんかね。

そいじゃ、

あと敬語やめましたあ。

## 第九話　そして伝説へ（笑）（前書き）

ネタが思いついたので別の小説も書きます。

が、こっちがメインなのであまり気にしないでください。

## 第九話　そして伝説へ（笑）

（優輝 side）

「1秒後です。てかこれが俺の仕事になるんだろうか…by白銀」

シュイン！そういう音とともに俺はダイオラマ球から出きたぜ。ダイオラマ球の中での修行っていうか腕試し？はだいたい終わらせてから、あとは新魔法やら新技のときとかに使っただけだろうな。もう実力的に言ったらあれだ、あの某魔法先生ぐらいの実力はあるぜ！まあそんなことを思いながら今度こそ出発の準備を始める。

「夜の7時です。……けっして手抜きじゃないよ。……by白銀」

「ふう、少し張り切りすぎたぜ。」

俺は『物質具現化』で創れるものを片っ端から創り　万能図書館に片っ端から蔵書していった。まあこの部屋に入る程度の大きさの物しか創れなかったけどな。まだまだ大型の創る物は残ってたがそれは後でいいか。

その後俺はティガルフさんたちと夕ご飯を食べた。ちなみに昼は食ってないティガルフさん家は1日2食が基本らしい。そうそうアリアちゃんはある後すぐに家に帰ったそうだ。さて、明日には出発だからな早く寝よう。ではではお休zzzzzz

「翌日7時ぐらいます。そろそろ出発しますぜ！by白銀」

「くああああ、ふう、」

俺は朝日とともに目を覚ました。うん、いい天気だぜ！俺はベットから起き上がり伸びをしてから部屋の真ん中に立つ……

「【全てを清める>>>・あかきじょうえん紅き浄炎】」

呪文を唱え体とジャージの汚れを焼き払う。うーん、魔法超便利だね。

「さて、んじゃ行きますか。」

俺はジャージの上からハンターUをヘルム以外装備しヘルムを削除する。バックバックを肩に掛け、マント手に持って部屋を出る。部屋を出たら1階に行きダイニングへ行く。

「ダイニングルーム」

「がちゃ

「お、おはようございます。ティガルフさん、ベアリウスさん。」

「おう、おはよう。」

「おはようさね。」

俺は挨拶もそこそこに本題を言う。

「今日は予定通りに旅を再開するよ。」

「……そうか、わかった。」

とこちらの目を見て頷くティガルフさん。

「そうかい、そりゃ残念だねえ。まあ、最後なんでし朝ごはんぐらい食べてっておくれ。」

と言うベアリウスさん。

「はい、もちろんいただきますよ。ベアリウスさんのご飯はおいし  
いっすからねえ。」

「おやおや、お世辞がうまいねえ、じゃあ準備するから待っててお  
くれ。」

と言い厨房の方に行くベアリウスさん。その後3人で雑談しながら  
朝ごはんを食べた。ご飯は普通にパンとコーンポタージュっぽいス  
ープそれから野菜の盛り合わせだけだな。まあそれでも充分美  
味かったんだけだな。

んでそんなこんなで現在8時ごろ。

「ん。ではそろそろ行きますわ。」

「ああ、じゃあ村の門のところまで送ろうか。」

「そうねえ、じゃあ私も行くさね。」

そういうと俺とティガルフさんとベアリウスさんの3人で家を出て村の門のところに行く。道中村の中を通ったが人とはすれ違わなかった。ティガルフさんに聞いたところによると、ほとんどの村の者は畑仕事や洗濯に行っており村にはあまり人が残っていないそうだ。まあ門に行くまでにティガルフさんから村の状況を聞いたり、ベアリウスさんに料理のレシピを教えてもらったり教えたりしながら歩いていたら前方にそれなりの大きさの頑丈そうな門があった。

「あれがアルラ村の西門だ。」

とティガルフさんは門の方を指さして言う。おおゝ頑丈そうだなあゝ……あれ？門の方に人影が？えゝつと1つ2つ……5人か誰だろあ、1人こつちに走ってきた。って……

「アリアちゃん！？って、ぐは！」

俺は猛スピードで駆けてきたアリアちゃんのタックルをもろに食う。アリアちゃんの身長はだいたい俺の胸元ぐらい、だからちょゝどいい感じでタックルが決まるからものすごく痛い。

それでも俺は何とか足を踏ん張り倒れないようにする。当のアリアちゃんは俺に抱き着き頭を胸に押し当てている。か、可愛い！けど苦し！獣人パワーで抱き着く、というより締め上げ殺す。という感じなので。ああ、何か下半身の感覚が無くなってくる。

あれ、あそこに綺麗な川とお花畑が。川の向こう側では2人の人影がこつちに手を振ってんよ。あ、死んだ親父とお袋だ。おゝい、親父ゝお袋ゝそつゝぐべら！

「パン」グハ、「パン」げはつちよやめ「バキ」ごめつ！謝るか

ら殴らないで！ごm「パン」げびゃ！」

俺はいつの間にかマウントポジション？になっているサクラさんからの往復ビンタ？てか往復パンチ？によって三途の川から帰還した。っていうかサクラさんの余計な攻撃でまた三途の川に行きそうになったけどな。

てかこれティガルフさんと同じ状況じゃね？と思いながらティガルフさんを見ると、こちらを同情の眼差しで見ている。同情するくらいなら止めてくれや！

「あ！す、すまない。大丈夫か？」

と言いサクラさんは申し訳なさそうに俺から離れ、上目使いでこちらを見る。

「てゝ、顔面がものすごく痛い。サクラさん、アンタ方獣人は力が強いんだからもう少し手加減してください！」

「う、す、すまない。（しゅん）」

と言いサクラさんはしゅんっと耳を垂らし俯く。……か可愛い！！いやあゝ、ねえ、もうこれが見られたから別にいいかな。なんて思っていると……

「……………（ちよいちよい）」

と裾を引っ張られたのでそちらを向くと……

「……………ごめんなさい。（しゅん）」

と言いいアリアちゃんも顔を俯かせ耳を垂らしている。……うおおお  
おおおお！落ち着け俺！此処で変なこと思ったら間違はなくロリコ  
ンの烙印がああああ！で、でも可愛いー！！あゝもうタツクルの事  
もなんかどうでもいいやあゝ

「いいっていいって。謝ってくれたんだから許すって、ほら、サク  
ラさんもアリアちゃんも、顔あげて！ね？」

そう言いながらアリアちゃんの頭を撫でる。アリアちゃんはこちら  
を見ながら気持ちよさそうに目を細めている。……猫だなあゝ撫で  
るより喉を掻いた方がいいのかな？

と思っているとふと2人の服装が目に入った。……おかしい、見送  
りにしてはおかしい格好だぞ。

アリアちゃんの格好は濃い茶色のカーゴパンツ？と少し汚れた感じ  
の白色のＴシャツを着て、深緑色のマントを羽織っている。関節部  
には鉄製だと思われるプロテクターを付けているが、それ以外の防  
具は付けていないようだ。

カーゴパンツと同じ色のベルトには茶色いカードケースのようなポ  
ーチ（材料はおそらく布）が2つとナイフが2本括り付けられてい  
る。

サクラさんの格好はおそらく下地は俺のハンターUの下地と同じ素  
材っぽい赤黒い布を着ていて、その上から鈍い銀色の胸部を強ty  
……げふんげふん、プレートメイルを、腕には大きめのバトルガ  
ードを装着している。……赤い線が入ってるのは元からそういう物だ  
った。ということにしよう。

腰には膝くらいの長さがある金属板で補強したバトルフォールドを  
装着し、脚には丈夫そうなバトルグリーヴを履いている。まあほと  
んどバトルシリーズの防具だな。男女別の防具は関係なくなってる  
けど……んでまあ、茶色いマントを羽織い、ベルトにはアリアちゃ  
んと同じタイプのポーチと剣が差してある。

……え〜つとこの2人の装備は何？とアリアちゃんを撫でながら考えていると、サクラさん、ティガルフさん、ベアリウスさんが残りの人影、アスライアさん、アグリウスさん、アスライウスさんのところに行つて何か話しているな。ちよつと行つてみるか。

「アリアちゃん。サクラさん達の所に行こうか。」

「……………わかった。」

と言い、こくん。と頷く。俺はアリアちゃんの手を繋ぎサクラさん達の所に行く。

「／／／／／」

〈優輝 side out〉

〈門前 side〉

「あれ〜、サクラちゃん何か面白くない事でもあったのかなあ〜？」

「い、いや、そんなことは無い！そ、それよりジェイクに話さなくていいんですか！」

「あ〜！聞いた聞いた！？ジェイクですってジェイク！呼び捨てで呼んでるよ〜」

「／／／ジェ、ジェイク君に話さなくていいんですかアスライア

さん！」

「おやおや、そんなに照れなくてもいいのにねえ」

「て、照れてなんか……」

「んふふふ、じゃあ、そういうことにしとくわね。」

「お、ジエイク君とアリアが来たぞ。」

「本当だな。おゝい！」

〈門前side out〉

〈優輝side〉

俺はアリアちゃんと一緒にみんなの方に歩いていくと……

「本当だな。おゝい！」

とアスライウスさんがこちらに手を振っている。……ふむ、アリアちゃんとサクラさん以外は普通の布の服だな。どゆこと？……まあいいや。

俺とアリアちゃんは小走りでアスライウスさん達のところに行く。

「おはようございます。アスライアさん、アグリウスさん、アスライウスさん。」

「ふふふ、おはようジェイク君」

とアスライアさん。 なにか面白い事でもあったのかな？

「おはよう、ジェイク君。 朝から災難だったね。（ニヤニヤ）」

とアグリウスさん。 そう思うなら止めてくれよ！

「おはよう、ジェイク君。 で、腹と頭は大丈夫かい？」

と苦笑しながら言うアスライウスさん。 アンタだけだよ心配してくれるのは。

「ああ、何とかな。 んで、アンタらはなんで此处に？」

見送るか？でも俺言っていないしな。 …… ああ、アリアちゃんと言ったのかな？

と思っていたらサクラさんとアリアちゃんが俺の前に並び……

「ジェイク君頼みがある。 私たちを旅に同行させてくれないか？」

「…………… おねがい。」

とのたまうお2人さん。

……………。

「はああ！え？ちよつま！え！？」

え！え！なにになにに！？うあああああ、メダパニメダパニ！イ

エラーアラート、イエローアラート！

「無理を承知で頼む。連れて行ってくれ！」

「……………おねがい。（うるうる）」

と2人は言う。いやいやいや。まてまて。落ち着け俺！もちつけ俺！とりあえず素数を数えようか、2、3、5、7ぶつぶつ……

「……………え〜つと何、君たち2人は俺の目的地不明、行き先適當の旅に付いてくると？」

「ああ、その通りだ。」

「……………うん。」

とのたまう2人。う〜んそう断言されちゃうと言いようがないな。仕方がないここは親御さんにひて……

「私からもお願いするわ。アリアちゃんを連れて行ってあげてくれない？」

「僕からもお願いするよ。ほら、せつかく村の連中以外と親しくできてるのにまた昔に戻すのはだめだと思ってね。」

「俺は何も言えないが、本人たちの願いは聞いてやってほしいな。」

「僕からもな、サクラを連れてってやってくれないか。」

「あたしからもお願いするさねえ。サクラちゃんはいいい子だから今

までやりたいことをやらせてあげられなかったしねえ」

と言いお願いしてくる。えーっと知らなかったのは俺だけなんですね。ということはすでに昨日から準備していたと言うことか……。

「……………連れて行くのはいいですけどいいんですか？俺は人間ですよ？もしかしたら連れてった後奴隷にするかもしれませんよ？」

と全員に聞いてみる。すると……

「ふふふ、大丈夫よ。あなたはそんなことしないわよ。」

「……………何故そんなことが言えるんですか？」

「ふふふ、サクラちゃんから聞いてるのよ。あなたのこと。」

「それだけじゃなくて、アリアからも盗賊連中との会話のことも聞いているんだよ。」

「儂らが相談してな。その時アリアが話してくれたんじゃない。」

「えーっと、たしか『お』『ぎゃあああああああああ！  
言わないでくれえええええええええ！』……………じゃあ連れて行くさね。」

（ニヤリ）

……………これは、強制イベントなのか。……………準備はできてるっぽいしな  
連れて行かなきゃダメか。勝手気ままな一人旅をしたかったんだけどなあ、まあみんなでワイワイしながら旅するのも悪くない、かな？

「はあ、仕方がないな。いいよ。」

「え、いいよ。とは何かな?」

「……………着いて行っているの?」

「うん。着いて来ていいよってこと。」

「あ、ありがとう!（ぱあ〜）」

と言いつれしそくに耳をぴこぴこ動かしているサクラさん。

「……………ありがとう（にぱあ〜）」

と言いつこりと笑いながら耳をぴくぴく動かし抱き着いてくるアリアちゃん。今度は抱き締め殺すといった感じではなく抱き着くという感じ。

……………あああああ! もう二人とも可愛いなあ! もう! 抱き締めたいくらいだ! ……でもそれをやると変態の烙印が付きそうなのでちよつどいいところにあつたアリアちゃんの頭を撫でる。はあ、可愛いなあ〜。

つてそろそろ行かんとやばいな。俺はアリアちゃんを撫でるのをやめて、みんなの方を向く。……………その際アリアちゃんが残念そうにしていた気がしたが。……………気のせいだろ。

「え〜とんじゃ、そろそろ行くわ。」

「ええ、気を付けてね。」

とアスライアさん。

「アリア頑張るんだ。負けるんじゃないぞ。」

とアグリウスさん。……何に？

「くつくつく。まあ君も頑張れよ。」

とアスライウスさん。……だから何を？

「サクラも負けんなよ。最初を奪っちまえ。」

と言うティガルフさん。……だから何の話？

「何言ってるんだいアンタ！まあサクラちゃんあの子は鈍感そうだからガンガン行かないと2番目になっちゃうよ。」

と言うベアリウスさん。……だから何の話してんだよアンタら！

「……／＼／＼ん、がんばる。」

と若干頬を赤く染めながら言うアリアちゃん。……ってかさっきの言葉の意味分かったのかよ。

「／＼／＼な、何を言ってるんだ。そんな、ゴニョゴニョ、……が  
んばるよ。」

と真っ赤になりながら言うサクラさん。……なんか最後の方が聞き  
づらかったけどなんか言ったような。……まあいつか。

「さて、んじゃ行きますか。ではみなさん、星の巡りが良ければま

た会いましょう。」

と言い俺は西門を出て道を歩いていく。

「……………ん。行つてきます」

と言い小さいめのナップサック（布製）を背負い俺についてくる。  
そして右腕に抱き着くアリアちゃん。……………何故に…。

「村長が仕事をさばらないように見張りをお願いします。それじゃあ行つてくる。」

と言い大きめのショルダーバック（革製）を肩にかけ俺の左腕に抱き着くサクラさん。……………だから何で？…。

「それで、どこに行くんだ？」

と聞いてくるサクラさん。

「グロンだよ。あと、正直言つて歩きにくいから2人とも離してくれ。」

と俺が言つとしゅしゅつという感じで離してくれた。……………悪いことしたかな？

そんなことを思いながら俺とアリアちゃんとサクラさんは西にある街、グロンへ出発した。

—————そしてここから伝説が始まる！





第十話 幕間（前書き）

しばらくはモンハン廃人っすよ。

え？テスト？何それ美味しいの？

## 第十話 幕間

——ガラスティラン王国・王都・王城最深部——

「???? side」

ピカアアアアアアア、シュイン

「痛たたた、な、何なのぉ」

私は学校の帰り道に突然現れた魔法陣？に突然吸い込まれちゃいました。

そして今は、怪しげな祭壇にいてローブをかぶった怪しい人たちに囲まれています。此処どこなんだろう

と思っているとローブの集団から1人の人が出てきました。私の数歩前まで来るとローブを外しました。……すごいイケメンの男の人です。

……けど、どうもこの人はどうも好きになれないなあ。そう思っていると男の人が……

「お願いします。私たちの世界をお救いください。——勇者様。」

と言い周りの人と一緒に頭を下げてきました。……って

「私が勇者!?!」

「???? side out」

——バルグラムシエル教国・大神殿・大天使（教皇）の執務室——

「???? side」

私は今、大天使様の御部屋に呼ばれています。何やら重要な使命を授けるとか。

まだ見習い天使なのにそんな重要な使命を私に授けてくださるなんて、頑張つて成功させなくては。と思っ  
ているますと大天使様が……

「見習い天使よ。顔を御上げなさい。」

そう言われ私は顔を上げます。

大きめの執務机の向こう側には年若く大天使なられたお方がこちらを見えています。代々大天使様の名前は誰も知りません。

就任すると過去の名前は捨て、新たな名前を神に付けていただくとか。

「見習い天使よ。今、世界が乱れていることは知っていますね。」

「はっはい。魔王が世界を征服しようとしているとか……」

私は大天使様に聞かれたことを知っている限り話します。

すると、大天使様は私に向かってにっこりと微笑んでくれました。私、感激です！

「はい、その通りです。そして先ほど入った話ですと人族が勇者を召喚したそうです。」

「ゆ、勇者をですか!?!」

驚きです。勇者を召喚するのは並大抵の努力じゃ召喚できませんからすごい出来事です。

過去に召喚された勇者は皆魔王を滅ぼすほどの力を持っていたと伝わっています。だから、この戦乱に終止符を打つことができるかもしれない!

「そうです。ですが見習い天使よ。先日、獣族の『神秘の森』で大規模な魔力の流れが起きました。その魔力量はおおよそ人1人を召喚できるほどのです。

知っていると思いますが獣族は魔法が使えません。ですからこれは人為的もしくは何か偶然が重なって起きた可能性があります。」

「獣族の森で誰かがもう1人勇者を召喚したかもしれないのですか!?!」

「いえ、獣族の東の最端の森、『神秘の森』は誰も入ることができません。」

「でもそれじゃあおかしいです。誰も入れないんじゃ召喚はできません。」

「はい、ですからもう1つの可能性。偶然が重なって召喚されたかもしれない。」

「そんなことって起きるものなのですか?」

「おそらく、可能性は低いですがね。」

「そうなのですか。」

でも、そうだとしたら召喚された人は寂しそうです。周りにだれもいない状態で突然の召喚なんて……。

「そこです、見習い天使よ。」

「は、はい。」

「あなたにはこの召喚された者を連れて来てほしいのです。」

「わ、私ですか!？」

「はい。先ほども話した通り今は魔王がいて国を出れるものが少ないのです。今国を出れるのは見習い天使。あなたしかいないのです。やってくれますか？」

「も、もちろんです。頑張ります!」

「では、この『探知の首飾り』を付けなさい。その首飾りで召喚された者がわかるようになっていきます。」

「はい!分かりました!それでは行ってきます。」

「はい。道中気を付けてください。」

〈??? side out〉

「???? side」

「魔王様。」

「なんじゃ?」

我が寝る前のお楽しみをしているときに話しかけおつて。

つまり内容じゃったところから（城の最上階）叩き落としてくれるわ。

「人族が勇者を召喚したそうです。」

「ほう、勇者をか。」

ギラスティランの若造どもが本気を出してきおつたな。まあ、また  
返り討ちにすればいいだけの事かの。

「それだけではありません。」

「ほう?まだあるか。」

ふむ、神族がなにかしかけてきたか。

「獣族の『神秘の森』で人為的なのか偶然なのか分かりませんが何  
者かが召喚されたようです。」

「なに?『神秘の森』でか!……あそこの森は我でも入れんいわば

聖域じゃ。人為的なものではなからう。」

「さらに神族の者が召喚された者の回収に出向いたようです。」

「ほう、神族が出向くか。……そのことは人族及び獣族は知っているのか？」

「いえ、知り得ていません。」

「ふふふ。面白そうではないか。よし、我が行ってみるぞ。では下がるがよい、てか下がれ。」

やっとお楽しみができるわい。

「……わかりました。でも、その前に……アンタは一応女性なんだから全裸で寝そべってレトロゲームとかやめろよな!!」

「な、何じゃとお!」

く???? side outく

## 第十話 幕間（後書き）

えっと、前回ここで「終わらない」とかほざいていましたが

正直言いましょう。無理です。

という訳で私情ではありますがこの回でこの小説を一時完結にさせてもらいます。

もしかしたら再開するかもしれませんが。

その時はまたお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6118o/>

---

異界の放浪者(仮)

2011年5月19日18時23分発行